あつま屋

こう治巻　六

哥を名とせり

[v.50]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 50
Copy 1
Asian
Japan
Case

2004551302

55

つくも山をまけ（蓋廿三夕ノ秋之）まほ（蓋山）しきれうろは有ながら
も山のしぐりまで。何ながちましひいらんもいと人
きくうろぐしう。かたもらいたうるべき程なれば
おぼしもらぐりて。れせうそこをぐまえつる人させ
給もず。かれあま（舟）君の許（まと）よりぞ。母（浮母ノ母）小方まの給し
さ夜ちまぐ。ふびくほのめしなるきれど。まめ（浮母母ム）
やうまれうろとまうべきことも也もほぐ。ふぐ
さ夜でもふぐほしり給らんことくばかり。おかしう
しひて。人のれほどれ。ふぐ今世まありがたげなる
ともかずならましかばなどぞ。弟（よろづ）まおもひけるか。
（常陸）うこのこどもは母なくなりまけるなど。何まるこの

ちらまも。姫君とつけてうしづくあり。まぶおさなき
をとすぎくに。五六人有れば。さ夜ぐにこれ
あれひとしつ。(淳和を)ことへとしひへぶそうろうろの
有れば。つゆにいとけらきもれにかこ(常陸)をもうしこ
つ。いかでひさすぐれて。おもぶくしきほどり
ゑるしてもこしにしがれと。あけれこれ(うきふ丶母)ちく君は
おもひあれひけり。さ夜(うきふ丶なり)ちのをれめりとり
まぜても有ぬべくは。いとかうしも何かはくるしき
までも。もてなやまくし。おなじこと(同子之)しもせても
ありぬべき世を。拙にもまじらず哀(あはれ)にかうじけか
くおひ出ぬへばあらしく心ぐるしき拙にしへり。

むすめおほりときて、お庵君ぎめく人ども、とと
なひいふ、いとあまたなりけり、そじめれいらの二三
人を、これさ庵ぐまくぐりて、おとなびさせたり、
いまはけが娘(法外ノ事)君をもふやうにてゝなるがやと、なけ
菅庵まりて、なでかしづくことかぎりなし、(常陸)うそを
いやしき人にはあらざりけり、上達アのすぢにて、
なからひも抱きたるき人なるぞ、(法)とくいかめしう
なぐあれば、ほどくにつけてもしあがりて、家の
うちもきらくしく、もれきよけにすゝなし、と
これこしたる程よりはおやしうあらくりに、
ねなりびたる心ぞつきたりけり、けうよりさか

あけまれ方のぞうかるるせゝいまうげまれてさし
へかればまやこゝろなどほどくうちゆがこぬべく
まれうちいふすうしごとこゝろやうまてがうけの
あたりおそろしくひづくしこまれまたぐり
とぢすべていとまさく すき庭なるき心もありおか
しさき庭まことふえのこちいとをうゆこをなんいと
よくひきけるなほくしさあたりともいまず いさ
とひまひかれてよきひ人どもつどひさうぞく
有さ庭ハえなるぞさくのへつくうしおれこるうこ
あまをぬがたりかうぢんとし（庚申）まばゆくこゝろしく
あこびがちまこれめるほこれけさうのこゝぶち

十三

ちうくしてこそあるべかれ。かうちなんいえじゃ
なりなど。おりしきこゝまいひなして。うろをつくし
あへる中に。左近(後ニ常陸ノ聲ニ娵ヘ)おねとて。さし廿二三ばかりのほどし
まて。心ばせしめやかに。ざしありといふかるに。人に
ゆかされたれど。さらくしうい海めいてなどは。え
あらぬまや。かよひしところなどもしていと
ゆんごろにいひつゝりかり。此(うさ弁母ん)ちくぞあまるゝかゝり
こといふ人どの中に。此(左近おね)君は人がらもめやすかなり。
心さゞまりて。相しひしりぬべかなる代。人もあて
なりや。これよりまさりて。ことくしききいの人
とゝ。かゝりあたりを。さはいへどこぞ。ゆらしじと

しひて、けれ(浮舟)ゝまさりつぎて、さるべきありくも、
おかしきさ海は色事などをさせしてまつ、こゝろ
ひとりはしひまうけて、(常陸)かゝこそとろかはしひなまて
た我は命をもゆづりてかしづきてん、さ海かたちの
めでたき我ゝつきながさりともとろかはなすどは、
よもしふ人あらじとしひたち、八月ばりと(ちぎり)契て、
てうど我まうけ、そうなき(あそ)様び物をさせてもさ海
ことはやうおかしう、まきゑらてんのこ海やかなる
心ぞ人まさりてゝゆる物をばこれれゝにとさり
くしてをさりの我これなんよきとてゝすれば、
(常陸)かゝそよくしもゝしらずそこいかとなきものだの

人のてうどいふぎりはこゝとりあつめてるゝ
すへりゝめ紙たづるさし出りぢうまて琴び
そのしとてかいけうぢうのつたりより。むかへ
りつるまゝ。てひとつひきとれば師をこち
ぬかゞこてよろこびろくととらすると。うづむ
ぢうまてもてさたぐたやまうるうく(曲)のもれ
ちどをしへて師とおりしきクメ嘗たまぐり。
ひきあはをてあそぶ時はなるぐもりゝ(まの)ず。
かこがましきまでさすがまもれめでたしり

かうことぐも候。母（淳和母）君ハすゑしもおくゆへしり
て。いとゝぐるしとおもへバことゝおへしらぬ
を。おろ候（常陸詞 我ノ女を云ヘ）ぞおもひおとしゐへりと。つれ不リ
うしゝハり。かくてこれ（た近ノ）かね。（ちぎ）契りし程候まち
つけて。おなじくはとくときめられぞ。ワがころ（淳和母ム）
ひとりよりしひいそぐも。いとゝけゝましう。人の
心のしりがたさ候せて。もじめよりつゝへこゝめけ
人の（中ごちゝ）こゝろまちうよびよまて。かうふ。よろづ（淳和母詞）
おほくせひもぐうことのあるを。月ばかうのなて
ほゞ候へぬる候。おまゝくの人よも抱し給ハれバ。
そうじけるう心ぐるしうて。かうせひこちよる候。

をやなど抱し給ひぬ人なれば心ひとつなるやう
まて。うたゝりしいたう。打あはぬさ夜まこしなること
もやとかねてなんおもふ。ひうき人ごあまた侍れ
ど。さふ人ぐしたるは。をのづからとさひゆづられて。
この君(浮)の御妻(こと)をのこなん。たゞれき世中をこなか
まもうしろめたくいこじき代。抱おぼしたりぬべき
御心ざ夜ときてかうよろげのけしましき代。志
ぬべかめるは。もしさしずなる御心ぞへもこしば。ひと
ひしへまかるしうなんといひける代。かねの君(中ごち 左近)は
まうでく。しかくなんと申けるは。かねしきあしく
なりぬ。(詞)ぢじめなりさしまこの御姫(むすめ)はあしびと

いふこと紙なんきかぎりつる。おなじことなれど。人
きくもけ紙とりたるうちもして。むいりきんにも
よかるずなんまるべき。ようもあないきで。うかひたる
こくつるへけるとの給ま。いとおしくなりて。くり
ともしりまへず。女ぜのしるたりまて。お同留
ごとをつるへてじめ給しまなりまかしづくひしてめ
とのこきく給れば。かこのまこそたとこそしまへ
つれ。こと人のこもまべしんともとひきく給らざり
つるなり。かたち心もすぐれてもれし給こと。たく
うへのかるしうしき給て。おもぐくしうけるかき
こと紙きんと。おがめかしげうときく給しうば。

いかでかれへんの夏ことつゝへいべかんへもがれと
の給ひきしかば。さらさらりしりうまへりと。とり
かしなり。さらにようかひさらつゝ侍るまじきこ
となりと。ちらあしくことぞおほゆる抱まてかしを
ま。云いとあてやかなるぬさ海まて。かやうのあさ
まはいきりよそんことひとのおさくゆるさぬこと
なれど。いまやうのことまて。とかあるまじうもて
あがめて。うしろうぐいは。いまうくしてなんある
さぐひもあめるを。おなじことくうちくまはぬふ
とも。よそのおぼしなんなつゝひて。へいひなすべ
き。源か納言。さぬきのうゝなどのうけぞりさるし

二人なるゝ常陸ノむこゝ

きまて むいたんに。常陸かこまもおさくうけられぬさ
海まで。まじらたんなん。いと人げなるべきとの
給。中ぐちん これ人にいそうかくうたてあるへの心まて。
これをいと口おしう。こなるかなるまいとおしう
心かれが。河海ことまかこ常陸れむすめとおぼさは。まぶ目
かうなまぐおもすとも。志るつるへ給ふんかし。かか
まあるるん。ひめ君とて。常陸かみはいとかなしう
志給なると罪者。小野河いさやもじめよりしかいひよ
れることをきて。又いたむこそうたてあれ。され
どけがほいはかれ。常陸を云へ のぬしのひとがしも抱ゆれ
志く。おとなしき人なれば。うしろこにもせまほし

うゝろところまでせひたじめし更なり。もいろ
かゝりたちのすぐれたるんをんなれねがひもなし。
しなあてまえんならん女をねがはぐやすくえいべ
し。されどさびしうことうちゆるぬるやびこのめる
人のたてくはもれぎよくもなく。人をも人とも
おぼしたるぬをこれバすてし人まそしらくとも。
なぐらかまて世中をすぐさんこと紙ねがふなり。
常陸
かこまかくなんとかたらひて。さもといゆるすやしき
あらばなまかはさもとの給。これひとくはいもうとの。
中ぐちを云之地
これましの御方(淳和)まゆるたりまゆるれ文なども
とりつたへたじめそれどかこ(常陸)まはくそしくもこし

仁八

しられぬ抽なりそう。ただいきまゝ（常陸）のねたりけり
まへにいきて。そりやべきことをしてなんといひす。
（常陸ん）そこ此ひたりに時ぐ出いりはすとしきけど。まへには
よび出ぬ人のなまごといひにかあらんとな雨あら
あらしき氣色なれど。左近（中ごち詞）が将愛のれをうそて
にてなん。さふら奴といはきされば。あひたり（常陸）。うた（中ごち）
らひがたげなる所をして。ちうねうて。月（詞）ぶろ
うちのれかた（うき弁）に。せうそこ罪しさせ。女代れゆるし
をして。これ月の程にとちぎり罪しさせ給ふ事を。
月をとらひ。いつしかとおもほし程に。おろ人の中
けるやう。雨ことに小方のれつらにもれしまへど。

常陸
かひの夜のれむすめまはおとをず。君ぐちのおりし
かよそんに世の罪なんへつゝひたるやうなるん。
ぜ乳(アヤウ)のれむこまなり給。かやうれさんぐちはたゞ
ひるくしの君のごとく。ぶりしづきなりて。くまり
さくげたるごとく。おもひあつかひうしろこなりま
うくまてなん。さらふるまひし給人ごまれし給
めなを。さすがまそれれねがひはあながちなるやう
まて。おさくうけられ給ふで。けをとりておとし
かよりんことびんなりぬべきましをなん。きりま
そしり人ごあまる詩なるれば。たゞ今ばしらず
らひてなん。そじめなりたゞきたくしう。ひゝの

うしろ〻とこれを実てんに。さん（たらひイ）なへるは元し
をえらひ申て。実（まさ）てしじめ申しなり。さらにこと人
にまれし給らんといふことしらざりなれば。もとの
はこゝろざしのまゝに。まぶにおされきもあまるにおい
するる紙。ゆるい給りぐいとうれしくなん。はゝ氣安
こてまうでことお目をかけつれでといふに。かこ（常陸河）さら
にうるはせうそこ給るよし。くそしくうけ給ちらず。
海ことにおなじことにしぬべき人なれど。よろしぬ
けうえべあまる給てぞうぐしからぬ身に。さ海
ざ海をひ身へあつふ程にぞくなるまれも。これを（浮ノ字）
こと人とをひけけうことく。くねりいふと給て。

ともかくもくらいれさきぬ人のことは侍れば、ほの
かにしらるんおほきらく変(こと)侍るとはきく侍し
かど、なまがしとさり所におぼしけるは心はしり
侍らざりけり、さるはいとうれしくせひおへらるく
はことはこそ侍なれ、いとらうたしとおもふめれ
けらは侍り、あまるの中に是をなん、食にもかへむと
しる侍るの給人ぐあれど、いまは世の人のは心さぶめ
なくさきて侍るに、中くむかいたきめ代やえんの
ちぐりに、せひさぶ世らることもなくてなん、いかで
うしろやすくもしおへをかんとおけられなるしく
しおふるとおね殿にをきなりて、おぢ(おねノ親之)ね殿にも、

けなくより来りつうまつりき。家のことそこまり
しまいときやうさくまつうまつらまほしと。
心つきてせひ買しかどもちろかる所ようち
つゞきて。道し侍る年比の程どまうぬくせく
覚し侍そなん。来りもつうまつらぬ代。かゝれ心
ざしの侍ける代。返しかしこまりなぐら。おほをれ
ごとなんハやすきことなれど。月ごろのれこゝろ
さぶへたるやうまこうれ人せなへんこと代なん。せひ
こまへたぐかり侍ると。いとこまやかまいふ。よろ也
げなめりとうれしくせふ。なまかとおぼしいぶ
うるべきまも侍らず。かれれ心ざしハこゝぶひと所せん

れゆるし給らんとねがひおぼしていちけなく年
こゝぬ程をおもすとも。しんぢちのおやのやんご
となくしひとさてまへらんとこそ。ほいなふまは
とめ。まはらさやうの。ほとりぢこゝらんあるまひす
べきをもあらずとなんのまひけ。人がらこそいと
やむごとなく。おぼし心をくおもする君なりけり。
けうさ君ぐちとて。すさぐしく。けてびてもおい
しまさず。世の有様もいとよくしりまへり。つもやう
じ給ふくもいとおほく給り。まごころのれとくなさ
やうなれど。をのづからやむごとなさ人のれけちひの
なりげなるやうなる彼人のうざりなさとこといふめる

いきをひまハ海さりまへり。らい年四位まなり給
なん。うたこの頭（とう）ハうたがひなく。（今上ノ勅作を中ごちノ説に）ミかどのれうち
づくごてまへるなり。よろづのことたゝひてめや
すき。朝臣（あそん）のめ代なんさぶめざなる。いやさるべき
人えりてうしろみをまうけよ。ふ遅アまハ口れし
あれバ。かふあれといふがりまなしあげてんと
こそおほせられなれ。なまごくもうぐ此君（かね）ぞ。ミかど
のもしろしくつうまつり給なる。れこころたる。
いとじうかうさくまなもしくしくなんおりします
ある。あたらん人のれむこ代。かう望し給程まおもほし
さちなんこそよくめ。かれ殿（かね）をバ我もしくむこる

とりなんと取て侍るれば、うゝにしぶくなる
れけちひあらば、ほかぎ海にもおぼしなりなん。これ
さぐうしろやすきことをとり申せと、いとおほく
よげにいひつゞくるに、いと（帯陸）あさましくひなびたる
かこにて、うち思ひ出てきてゐたり。これ（討）ごろ恋れ
とくなどの心もとなからんことはなの給そ。なに
がしいのち侍らん程は、いたづきにもさくげなる
てん。うろもとなくなるをあらぬとうおぼすべき。
さとひあへずして、つゝうまつりさし出とも、御身
のたゝら掲身やうじ侍取て、ひとつにてもまゐとり
あらそふべき人なし。子ぞおほく侍れど、是はさ海

ことはせそめたる物は侍りたゞまごろはおぼし
かへりこさせ給ひぐ。大臣のくらゐをもとめんと
おぼしねがひて。世はなきゑから物ともつくさん
と志給ひんは。なきもれ侍るまじ。こうじのこゝど
志かめくこゝ給なれば。れうしろこゝ心もとなる
まじ。これかれ此たあはもなまがしがめれ。ひらハれ
たあはもさいそいとあるべきことはやれ志らずと。
よろしげはいふ時は。いとうれしくなりて。いもうと
はもかうことありともかうらず。おなしはもより
つゝぞ。かんのいひつゝと紙。いとをしくよげなり
めでたしとせてこさしもれば。君すらしひなびてぞ

あつとはきゝぬへど。まくうしぎうち忍えてきてね
ぬへり。犬臣はちらん。ぞくらう（續労）をとらんなどぞ。
あまりおどろくしきことと。こゝとゞまりけり。
さて（おね詞）かの（浮舟母）ことはかくともれしけや。心ざしこ
とはおもひたゞめ給らんは。ひきたがへたらん
ひがくしくねぢけたるやうはとりはなしくへもあ
らん。いさやとおぼしたるにひたる紙。何かれ（うきふ母）方も
かれ姫（おねの書）をば。いとやむごとなき様はしひかしづき
なり給なりけり。たゞなるかれこれ（うきふ母ノ事）かたにて。とりも
おとなび給紙。心ぐるしきことはしひて。そなたはと
いひて。まうされけるなりけりときこしも。月（おねん）

ごろハ又なく。よれつゝまゝずかしづくといひ
ひくものゝ。うちつけまかくいふもいかなまゝんと
おもへども。程一つかりかつしとしたれ。人まは
すうしそしらるともなぐらへてこれもしこそと
をこそと。いとまゝくかしこさ君まてしとりかゆ
ぞれば。日紙ごまやりかへでちぎりしくれまぞおハ
しちじめける。水のくさハ人しれずいそぎこちて。
人ごのさうぞくをさせ。しつらひなどよしくしう
し給。此方（浮示）ともかしらあしちせ。とりつくろひて
こゝまゝ。お招などいふ程の人ハこせんも。おしく
あらしこさ夜と。衣やおやはしられ給りておひ

宮給りましかば、おもひ(かゝ)をすぐすありさまも、たれ(盡)
宮のゝ給ん、さ施は、おほけなくとも、ちかはせひ
うらやましまし、されどこうちくはこそうく、おほんへ、
ほかのさとくまつく、いふかこの(常陸ノ)子ともおもひつゞけず、まうで
きら給君人も、中ておもしめおもひめくべき
こそうしけれ、されちかごゝつゞく、いうぎきん、さうり
すぎ給ん、もあいちし、いや(かおノ子)しうしげにめやすさ
ほどなき人のかくねんごろなるの給めうとどもごころひ
とうなやひさぶ、むつも、中(地)ずちのうくこしらく
いうじさうし、(つねノせンニ入ノ子)女(浮舟母ノ心)いましてすうされうすやあらん
あすあさてとせんかたなく、心あらぬさくのそぞしかる、

こゝろをもこゝろのどうよねられたらずそくめ
きありくまゝ常陸とよりいりきて詞なりくと。さぐ
こゝる所もなくいひつゞけて。我とおもひへだてゝ。
あれはけさう人をうばいむとも給けるが。おほけ
なくこゝろおさなきことゝめでたうらんは娘(むすめ)をば。
ようぞさせ給志道あらじ。いやもしくことやうなん
なまがしらの女ごゝ代こそ。いやもうもこづもの給
めれ。しこくもしくはこゝてられかれど。もつらはいか
しとて。かかぎ夜へもなり給ぬべかなれば。おなじくは
もひてなん。さらは此心とゆるしゆるなど。おや
もしくあふなく人のおもはん所もしらぬ人にていひ

ちらしぬるり。さる（うさ弄母ん）の方あきれて物もいはれで。
さぢりしふる。世中のうろうさ紙りさつしれ。
潤もおちぬぢりしひつゞけられて。やをしらぬ。
しるゝまはりてゐる。いとらう（うさ弄）しげおしげ
まてぬすへなまさりとも人まはをとり給ひし
とはしひなぐさむ。めれとしふるり。心うき物も人の
心ありけり。をのれはおちしごとおもひあけうふ。
この君（浮ノ男なるしはとゝ）のゆりとおもはん人のゝあまは。命をも
ゆづりけべくこそしへ。おやなしとさてはなづりて
まゝおさなくなりあはぬ人をさしこえてゞくは
けいなるべしや。うく心うきあるりまて。こゝ

きうじとしひぬれど。常陸うこのくおもぶくしさ
ことはしひてうけとりさしぐめれば。おさましく
あひくまろ。世の人の有さ面をこうは。すべて
うくことはくちいれじとしふ。いかでこうなる也
ところは。しげしまましがれと打なげきけくいふ。
めれともいとりしぶくしく。けが浮身君にくおとし
まることしふる。あのと詞なまうこれも此さいといまてこ
ふことしともしらず。かく心くちおしくいまし
けり君なれば。おくしれさ面をもしらざらまし。
が浮身君をば心もきあり。抱しひしりくらん人はこそこせ
なしまほしかれ。大蓋殿の此さ面うちの。ほのうま

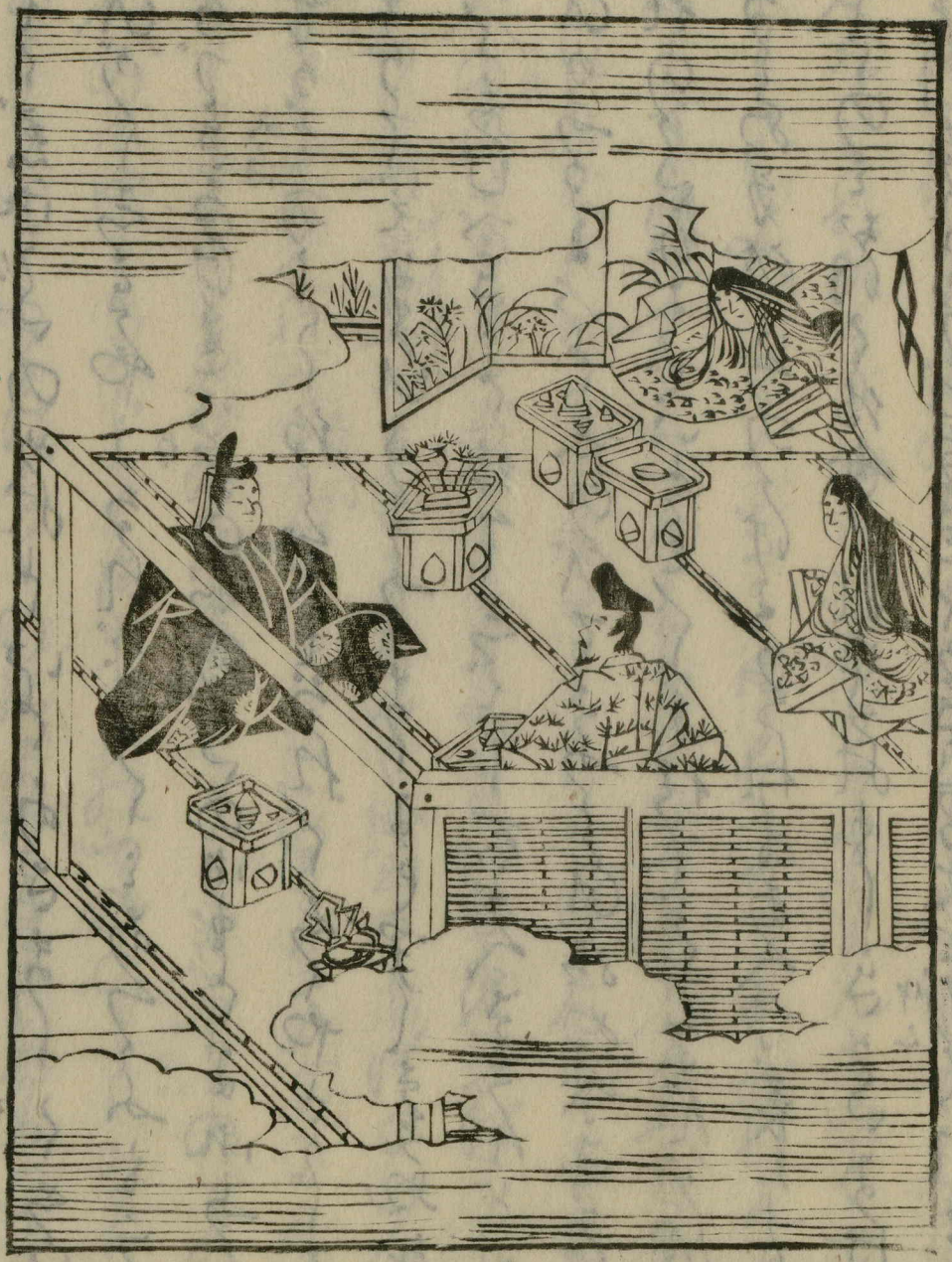
こなりしは。さも命のぶる心ちし侍しかれ。衰は
もとく罪を給なり。れすくせるまゐきて。さもおぼし
よりねりしといへば。あなおそろしや。人のいふ後
きけば。年比おぼろけなるん人をばこじとのなて。
左のおぼ夕夜。按察大納言。或ぞ一宮なるどのいとねん
ごろまほのめし給かれど。さてすぐして。
みどのれりしづさむすめ後えなへる君を。いか
ぞうの人をか。まめやかまはおぼさん。かれさて宮
なるどのれりしなあらきて。時ごもこんといおぼし
もしなん。それなるげまめでしつきれあらりなれども。
いとむまいるうんべきことなり。こやのうへのうく

さいたいべく世まゝなれど。抱きいしばるおぼし
ろう紙これば。いかまもくかる心なりしん人の見
しそめやすくこれもしさしくまはあらめ。我身
まてもしりまき。右家（ハノヤ）のれ有様に。いとなさけく
しくめでたくおしくおもしかど。人かずまも
おぼしがましかば。いかばかりかはこころうく。しら
かりしこれ（常陸と云之）いとゝいふかひなく情（なさけ）なく。さ夜あしさ
人なれど。ひとをもむさまふる心なさをこれば。心
やすくて年代をもゐしつゝなり。おりふし志
心だ人のかやうまあいじなく。よういなさこと
こそまくれ。なげしくうしめしさこともなく。

かくこそまうちいさうひても心まあらぬことをぞ
あさらしめ川上遊戸みこうちまて。うやびうまこうる
ちづしき人のれあるりといふも。我(いが)ぞなるでハ
ひあらじ。ようづのこと我身うらおもひなりとも
しへバよろづまうるしくこそこなれど。いうまして
ひとつしへなるず。しるてなんとうらふ。常陸
いそぎこちて。河(河)なぞこちるまめやすさあまる
あるる代。これ国どハあらせぬへ。やがて怯(ちやう)なども
あるらしくしるてられるあるる代。ことまはうま
なりまゝあれバ。とりつるしとくあらしむまじ
とて。これまし(浮舟ノ方ニ)のるまきてこちねらくしつしひ

けちぐめやすささ夜まさびしうまあらりくあ
べさうざりしるる所を。けうしるは屋風(ひやうぶ)だもてき
て。いぶをさまでこてあつめて。だし。まかいなどあや
しさまでしくもへて。心をやりていそげば。
こぐるしくこれぐらいれじといひてしかば。
こぐまこうさく。けうこ(浮氣)は小おりてまねなつり。うこ(常陸詞)人
の此心はこしつともてぬ。こぐおるじ子なれば
さりともいとうくはせひもちち給りじとこそせひ
つれ。されば世ま無ちまさ子はなくやはあるとて。娘(むすめ)を
ひるよりめれとしふるりなでつくろひこてこれば
よくげまもあらず。年十五六の程まていとちいさ

やうなふくらうなる人のかこうけらしげにて。こ
うちさのほどなるすそ。いとふきやかなり。これを
いとめでたしとせひてなでつくろふなるよう人の
ことざ面をせひうまへられなる人をしもとせんど。
人がらのけたらしくうさくうまれし給君なれば。
まれもくとむこまとらまほしくする人のおほかな
なる。さられなんもくちおしくてなんとかれ沖
人をもとられていふもいとさこなり。おとこ君も
これらくのほどいかあしくせふやうなることく。
よろげのつこあるまじうせひて。その夜もかへど
きこそめぬ



ちくぶれ（浮手）のめれといとあさましくせひ
ひがくしきやうなれバどうくこあつかふもこ
ろづきなけれバ（白）家の水の（中）ろのれまとまれふこ
まりそ（文詞）のことく侍らでもなれくしくやとうしこ
まりてえまひしまふるまくまも深しさきぬを
つくしむべきと侍てしばし取がへさきんとせ
ひまふるまいとしのびてさふらひ給ぬべきかく
れのろはもぐいともくうれしくなんかげ
なるぬ男ひとつのげまうれもあへず衣なる
ことのこおほく侍世なれバこれもしきうるまは
まげなんとうちなきつくきこる文をおもふれとこ

ニ給ひれど、こ家のさづりゆるし給ひてやミ
人をまれひとりぬりて、しりかたらひんもいとつ
ましく、又ミぐるしきき夜にて、世にあぶれんも
しらずが得にてきりんとそ、うろぐるしかるべきれ
ことなることなくて、かたミにはりぼりんも、なき
人のれためにミぐるしかるべ、さけぐ後、おぼし
をづらふ、さいふが（ゲノイヒル女ミ）もとにまも、いと心ぐるしげにいひ
やるとうりれば、さるやうにそハ（大輔詞）侍らめ、ひとにくら
もしらなくもなの給ひせそ、かうをとりのもの
人のれ中にまじるを給も、よれつきのことなり、
あまりいとなきけなくの給まじきことなりなど

罪して、さらばかれましのうへよりくろへたる事
志出て、いとむつかしげなめれど、さてもすぐい語つ
べくハ、志ぞしの程といひつゝもしつゝ、ゆゑうれし
とおもほ志て、人志れず出たる、此事も、かれ此あたり
とがむつび罪しまほしとも志ふ心なれど、中に
うらことぐものいできたるをうれしとおもふ、
ミ少ねのあつかひをいかぞかりめでたきことと後
きんとも志つゝ、そのさらくしうるべきことも
志しぬ心なれば、ことぐならしかなるあづまぶぬども後
もしまろうしてなげいで、何ぐひ拘もさらしきこ
まぞなむとゝびいでゝのしりける後、ぞするどは

それをいとうしうさるさけにおもひそれが君(かねん)も
いとあしまほせく心うしうくとりよりにそりと
せひそりふのうたうれ程をこすてくせしざしんも
ひがこしたんとせひもんぜて、あぐするまゝそり
ありきてこねたりまゝしうとのれでいさつしひと
しつしひさもげバいへハひろそれど源(常陸ノ聲之)お鈍云、東(ひがし)の
しいりはしむとのうぐなどのおほうまに取もなし。
うれれうたに海(かね)らうとすこつきぬれバらう(浮永母ん)など
ほとりどこしたんに、すまを(浮永を)なしんもありずいと
おしくおぼしてさうくせひめぐしれほど、家(白)そり
とはせふなりそりこのれうた(浮永)ざ海にうずまへおふ

へのなさ紙おれづるなりとせんにことにゆるい
給もざりしあるりをおかがちるよ事す。中ノ花のと
もるさ人ぐ二三人ぢりしてかしれひさしまん
わるよりて人げとをさゝるまつぼしたり。
年だゝくもるゝなりつれどうさくおぼすまじき
人なれば事るときハもぢ給ひずいとおしまほし
くけもひゝとまて。ゆゑ君のれ給つゝひをしておハ
する。れ宿猶うしやましくおぼゆるも哀なり。我も
八ノ和方ハ浮舟母ノとぞ之
おれのるまハもなれなるべきひとゝハ。けゝう
まつるといひしぢりまゝずまへられなしずくち
かしくてゞく人まはあなづらるくとせふまは。

しなくてひつびきゝゆるもなげきなしかしてまゝ
此物いことくいひてぞれば人もかよはず二三日ばかり
（浮舟母）ちくぶもねたり。うたゝはこゝろのどかなこれ此（中ノ）
なりさ夜をこゝろ。（白）変はたり給ゆ（浮舟母ハ）しくて物のはざ夜
よりこれば。いとくきよらゝ様をなりさ夜志なて。
はがこれもし人にしてつゝうゝふらめしかれど。
こゝろまはさがりじとしふひたちのこゝより。さ夜
かたりも人のほどもこゝよなくこゝゆる五位四位ばし
もおひてざ夜づささふらひて。これことかれことと。
なたりくのことどもけいし。ともなどや又ほう
やうなる五位どもかほもしらぬとこもくおほかり。

帯陸が子先脇へ

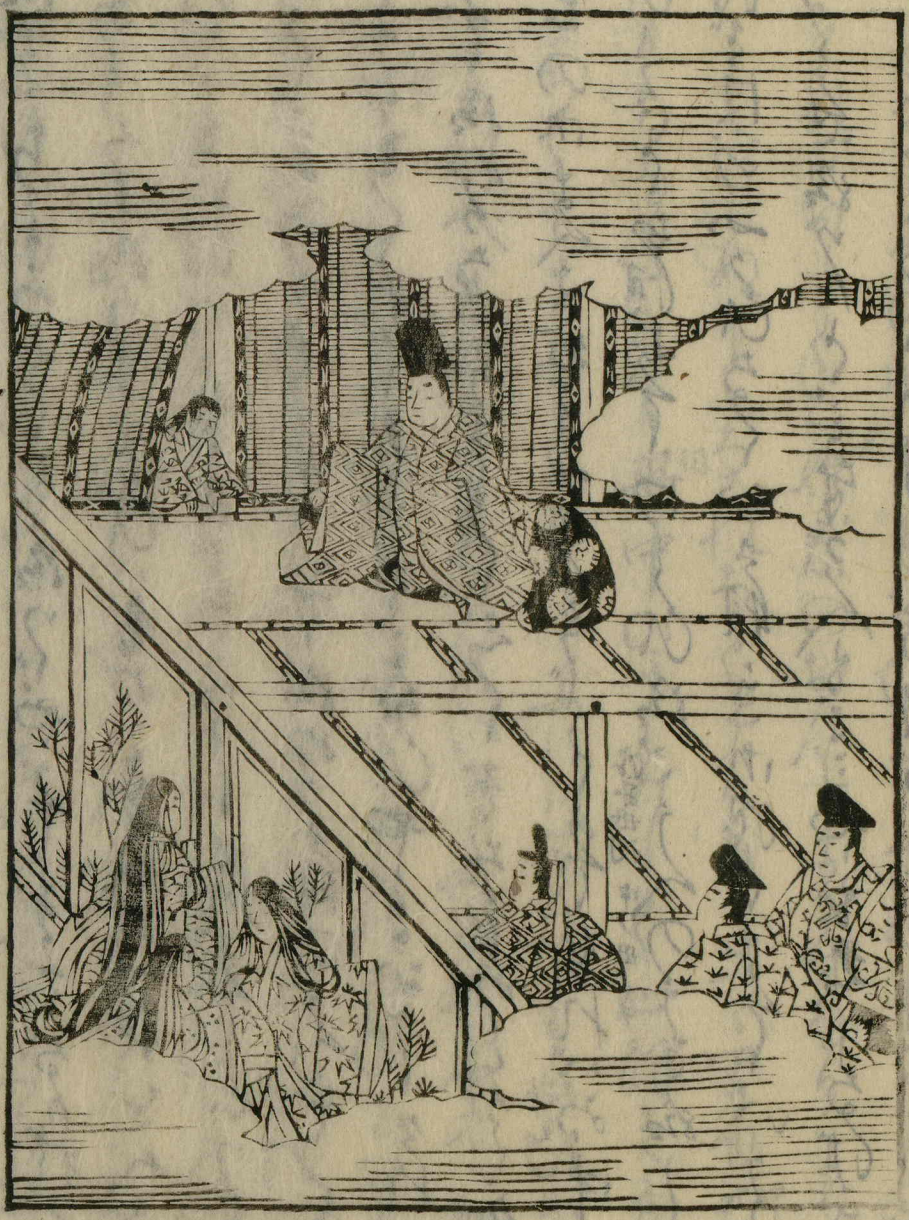
ワがまゝこの或ゝのぞうまて蔵人なる内の御使
まてまいれり。御あくりまもえちかく来らず。こゝよ
なき人のれけるひをおもれこもなまべぞ。かゝる
御あくりまおもするめでたさよ。よそまおまふ時は
めでたき人ぞと思ひもつきめさせ給ふぐと。
物うくをしもかり思ひさせつゝんあさましさよ。
此御ありさ後かたちをこれば。これがたぐりまても。
かやうまこまりかよもんは。いというじかる麁き
ワぎかれとせふまワが君いざまてうけらし見
おもす。如(けぎ)ぎこゝ見じかさ事をへぞてかはする後。
自ノ
としやつまて。物なぐこまて給。御かたちどもはと

きたりしまにあひたり。こ家のさびしくおもしき
れ有さ夜をおもひくらぶるに家さらと罕ゆれど
いとこよなきけぢまこそ有れとおぼゆ。本(白)根の
うちまいり給ぬれば。けぢ。ハけうさめれとなど
もてあそびきこゆ。人ぐとまりあつまれどなやまし
とておほとれごもりくらしつ。れ多いしなるてり
まいる。よろづのことけさかく。こころしまこゆれば。
けがいうじきこと紙つくすとこそ人ぐ。な紙く
しき人のなるりは。口おしかりなりとおもひなり
ぬれば。けがむすめもかやうまて。さしなしべくらん
まはりて。ほなしじかし。ゆぐけきいさきひを

これにてしらぬしの（常陸ます）有（きゆき）にもなしてんとおもひ
る人ぐいおるじ口ぐこなぐらけそひこよなる代
おもふも稚いまより後も心もとなく川ふべかり
ぐりと夜ひとよあらましごとよしひ口ぐさま
（白）家日にけておさなて（訪）ささいの家れいのなやまし
く云なへばまいるべしとて此さうぞくなどし給
ておもす（浮舟母心）ゆくしうおぼしてのぞけば（白ノ）ぐうりしくひ
きつくろひなへるもとよる物なくけさくおいり（ぎやう）
つきさまらまて口ぐぎこをえこすて給ひて（白）
あそびおもす此り也こはいひなぐ来りてぞこなる
より出給けさより来りてまつらひのるよやす

らひけり人ぞいまのぞ来りて物なぞ望ゆり中ま
きよげぞちてなぞうことなき人のすき海ぞき
ゆきしろ。なをしき。こちりきこちあり。おまへまて
なまともえしぬ紙。かれぞ（旧ノ者ノ詞）しひこちのこのむこ
のかねなたじめいあのれかこ（浮丹）まとさぞめける紙。
（常陸）かこのむすめ紙えてこそいこたれめなぞいひて。
かじけこちめれりしをえこちなるまいさこれれあ
こりの人いかけてもいまぞかむ（常陸ノ名ニ）のさこ乃かこ
より。よくきくたよりのあるなりと。そのがぞちいふ
きくらんともしらぞ。人のかくいふまつけてもむる（浮丹丹ん）
つぶれて。かね（左近）をめやすき程とせひけるころも

くちおしく・げまことなることなるべかりけりと
ちひて・いとゞしくあなづらしくしひなりぬ
ワゝ君のたひ出て・三寸のつまよりのぞきぬへ
なる紙・白ノうちミなてしたりへりよりおりしたり



白河
れうちよろしくこそ給りぐやがてまぐるんれく
ゐしくし給りぐこよひハ無ねまぐ今ハ一夜をへぶ
川るもおぼつるきこそくるしかれとて志げし
るぐさああそぐしていで給ぬる南のうへもとく
ころともくあくまじくまゐひやうなおかしかれば
いで給ぬるなどりさうぐしくぞたまがめくらく女中
君のれまへに出さていこじくめでなれば内中
びさるとおぼしてつしひ給こうへのうを給し
浮子母河 中ノ母ノ子之
ほどは、いふかひなくおされきれほどまていかな
るこせ給りんと、こなる人も、ここやも思しなげさ
しをこよなきれすくをの程なりかれぐさるに。

ぶどころの中にもおひ出させ給しにこそ侍り
なれ口おしくて姫(大)君のおはしまさずなりにくろ
こそおぼえなれなぐうちなきつゝ男也君(中)も
うちなきなて世(何)中のうゝめしく心ぼそきお
まくもまさくなぐふれがすうしもせひなぐ
さめひべきありもある代いにしへこれ三男しけり
(父母之)げどもにをくれなりは中くによれつゝにおもひ
なされて三年りしらずなりになれがおうを見これ(大ノ)
れことはつきまずいうじくこそ大(葉)将殿のよろぶの
ことに心のうつゝぬらしをうれへつゝおさうらぬ
れ心のさ面をうるにつけてもいとこそくちおし

それとのぬへば大拘(浮毎詞)殿はさぞかり世にとめしなき
まで。ミかどのかしづき見しとなるに。心をごり
し給らんかし。おかしまきましかば。お紙このこと
をかれしも志給はざらましやなどこそも。いさや(中詞)
やうのものと。人はしられなる心ちをましも。中こ
ちやあらまし。こもてぬにつけて。心にくくもある
世にこそもとしへどかれ。君(基)はいかなるにかあらん。
あやしきまで抱はれをず。こ(八)家の此後の世な
さへしひやすもふく。うしろこはりき給めるたまど
心うけしうかたり給。かのすぎましれかたりに(浮毎詞)
あてこんと。これかずなしぬ人をさへなんかれ弁(づ)の

尼君(おほ)にはの給けるさもやとせひおへよるへこ
とにはゆるしぞ一もとゆへにしてもとるさぶけ
なけきと衰になんせおへるに此ちろふるさなる
などいふついでに此君(浮)をもてまづしふと、なく
なくなるろ、ろ夜なにはあしきぞ、へもきくやりと
せふに、お(左近ノ)拘のせひあなづりけるさ夜などほのめ
りして、いのち侍らんかぎりはなまゝ朝夕のなぐ
さめぐさにてしすぐしいべし、うちすて侍なん
後はおもしろずなるさ夜にぢりぼひ侍らんがかなし
さに、何まにまなしてふるさ山にやしすへて、さる
かたに世中紙せひとして侍らましなどなんせひ

まへ端てはさかり侍るとかふけは心ぐるしきれ宥（中詞）
き夜はこそはあるれどなすはなき人はあれはしらく
れありき夜はいかやうはなかりぬる人のさがはこそ。
きりさもえらん人てもらぬけごちなりえれば（ハ）むけは
そのくるはさひみえて出へりし身をごふかく心
よりほかはなかうふれはまいそいとあるまじき
れとくるりや何以給さんもいとおもしけなするれ
き夜はこそなかくやとおもちなひでのまへが（浮舟心）母や君いと
うれしとせひなり。（地）みひはこかき夜なれどもよし
なくぬき夜ちてきらけやいかくらしすぎきはらう
なんひとちうまをいとしけるごと（浮舟詞）（ハ）やのつらうならけ

なくあばしたるちうちまいとゞひとげなく人
まもあなづられ給とゝ給れど、うきてしさせれ
らんぞらるゝまつけてなん、いましへのうきもなぐ
さゝ侍るなど、手代の拙続うきしまれ衰なりし
とも冥しいづ、秋ひとりのとのゝいひあはする
人もなきゝ、門くも山の有さ度もかくあきらめ冥
さきて、いつもくいとゝくてさふらハまほしく
せひぬへなり侍ぬれど、うしこまはよろしぬあやし
の物どもいかまこちさはぎもとめ侍らん、さすが
ま心あれこしさくせひぬへらるゝ、うらほどのあ
まさ度ま、ゝ紙やつすはロおしきまれりなん

侍けるとも力まをせひきらくをこれ浮きこそしうじ
まうせ罪しさきてしり侍らじなどかうちきこそ
かれば中ん げまこぐるしからでもあらなんとこゝ給ゝ
こちも心ざ海もえまくむまじうらうこげなり物
まぢもおぢろくしからず。さ海ようこめいこな
物からかどなりしず。ちくさふる海人ごよも。いと
よくかれてねぬへり。拙などいひこゝも。むかしの
大は似たりとこ
人の此さ海ま。おやしきまで見てなりてぞあるや。
かれ人がこゝもとめ給人芸ま。こせなしがやとうちせひ
出給。おりしも大将殿来り給と人罪ゆれば。例の
此末丁ひきいくろひて心づかひす。これまらうとれ

御ぞいでこなさんはのこゝろそでまつりけつ人の
いろぢきこ氣は守ゆめれど家のれ有様はいえまるび
語りぞその人ばれ前はさふるふ人ぞいさやえこそ
守きさろめ目とくさうつてあへりむかひておはをし
家まいとあすさけあげはこうはくとしてそう語
しかどりこれらていづれもとあしくもつれ出ぞ
くつらよきへいひと続けにしそうくされとのあのへ
ばへがけしひてされどおまへよれをされ世り語ハ
ざありいくぞうりあしん人ゐ家をいけちしつてまつ
られなどいふ様はいまぞ東よりあり語ありと
さくゆぞうしらましさまでさひのありてとこ

まもこゝ給いず。まゝれ（荒）ゝるほどまあゆこいつゝ給
さ度をこれ（浮ノ母ハ）ばげまあかめでゝおりしげともこゝず
あがらぞ。ゐ度めしうあてまさまげあるや。すぐ
ろまこしぐるしうちづしろて。ひゝいがこなども
ひきけくろもれて。心もづしげまよういおほく。
きはもあるきさ度ぞしゐへる。内より乗りゐへる
るるべし。此前（ごぜん）どものけもひあまるまてぐへ（荒訶）舌（きはい）の
夏のあるやこ給よしうけ給いりて。乗りゝりしかば
こやこちのさふらひ給にざりしかば。いとあしく
こなりて。夏（旬）のれかもりま。今までさふらひ給ける。
けさもいとけざいして。乗（旬）らせゐへるを。おいあう

れあやまちにをしたり罪しさまてあんと
きうしあへば（中付）げにをろかならず。さひや里ふるさ
れよういにあんとげりいらへ罪し給。（白地）宴は酒に
とまり給ぬる後ことさてこゝにならずおりしろ
なあり。（荒）例の抱詫いとなつしげに罪し給ことに
ふれてこゝにいまし（大ノ字）へのつまれがこく世中のまれ
うく成（なり）度さるよしをおらはまはいひなさでかすめ
うれへ給。（中心）さしもいかでか世をへて心にもなれず
のこはあらんな後あさからずいひそめてしこと
のすぢなればなぐりなるらじとまやなどこなし給
へど人のれそしさはしるき抱なればこまてりまるに

衰なるれ心ざまに絶いたすまなしねばおもほしきる。
うらこ黒ノ 黒ノ 絶こしもおほかれば いとつりなくうち
なげきて かゝるれこころをやむるこそぎをきさせ
ならまほしくおもほすまやあらん。かれ人がこの絶
いでゝ いと 中行 悪びてこれつゝりまなんとほのめし
きこし絶を かれ 黒ん もなべての心ちはきび ゆかしくか
まほこれど うちつけまふとうつらん心 つゝきず。
いでやこち 小ん 弟ん ねがひこてまふべくいこそこうと
りしめ 時ぐ心やましくは 中こ山水もまごりぬ
べくとのゐへば ちて 中行 くもうくてのれひじ
ごろやとほのるつゝひ絶も おかしう 浮ノ母ん さしも うで 黒記

さらばつかへてさせまいらし。それ〳〵のつれ言葉て
大ノリ
そ。せいづれいゆきあくとの語でも。まつ洞ぐらぬ
かし人のかしこまるまかぶ男まそへて忘て
きかせでのあすでもそれまきん。どれいのかはふれま
いひあしてまかぶらしみぬ
中
こそさざ河をでまいぶいさ毎もあすでまそれを男まそ
ふりげときされかされまん所かておまかくまとくやさう
あつくうれども。いとおもしくぞ縁かやとのくいまへども。
詞
つねまよりもはさらしあすりや。いとうれしさやうある。
らげのあもまもはらそひ縁かれがさあすがらく
あすでもそれ。いづで海らくぞうし。いかぞあすぐきじべき

ことぞなど。いひつ。くらうなるもうるさなれば。うり
そめるものしるへ（浮母）もおやしとおもふらんを
つましき紙。こゝろひいる紙とくゝり給ひと。こし
らへやつる給ざらばそのまゝうとまゝうるこゝろの
がひさしへぬるを。うちつけまなどあきうしおもひ
なるまじうの給ひをしらせぬて。いしなげなる
まじうにそいとうぬくしうなしひまて仰ものは
なるごくもおこがましきまでなんと。かくらひ
笑しをきて出給ぬるまこれ母（浮ノ母ハ）。いとめでたくさふ
やうなるれさ海れとめでゝめれとのゆくりうる
しよりてさびくいひしことは。おるまじきことは

いひしりど。これは有さ海をうるまはおまれげを
ひろりてもかるひこぼしの光をしてまちつけ
さきめ。我(ほぎ)むすめはるのめるしんひとるこきんも。
おしげるるさま紙。思びすめさうる人をのうしか
らひて。かね(た近ノ)をかしこうさ物ましひけるをくやしさ
までしひちりまかり。よりねまへり川る。まさ
ぢしらもしとのもちぢりまかへるうつりが。いへぞ
いとことさしめさうるまで有がうし。時ぐこなる
人ぶるこびごとるめで四方。鐙(さやう)ちどとよこてくどく
のすぐれうることおめるまもかれかうぢし。ほ紙
やむごとちるさことる。佛の給金(とき)けるもことり

なりや。遠くいうぞんなどまも。さりいさての給へる。
ごげきんごんとりや。おどろくしさものゝ給な
れど。まづかれ夜のちりくふるまひしるのへぞ。佛は
まことし給なりとこそおぼゆれ。おさなくおもし
けるより。をこなひもいこじくし給なればよかなど
いふもあり。まるさきの世こそゆかしされ有信なれ
など。くちぐめづることどもを。すぐろる思ふてき
きねさり。中忌は悪びてのなへることを。ほのめかし
の給。詞ひそめつることしうねさまで。かろぐし
うらずもれし給める紙。げまこぐいまのありさ夜
などをおもふは。いづらいしさ心ちすべかれば。かれ

世をそむきてもなぐさむより給らんも。おなじ
ことにさむひなして。心ミぬへうしとのぬへぞ。つら
きめこをず。人にあれづられじの心にてこそ。
鳥の着きてえざらんすまねまでさぬへをさ
つれ。げに人のれ宿き夜けらひとゝなりさぬふるは
さもづへの程などにてもかゝる人のれあたりけり。
なれきてむかひあるべし。まいてつき人は
心つけなりぬべく侍めれど。かずならぬこゝにもれ
さひのこれをや。いとゞまうきてミ侍らん。ふうきも
こじうれも。女といふもれいかゝるすぢにてこそ。け
世のちの世までくるしき身となり侍なれとさ

ぬへもべれがなん。いとおしくおもひこまへ侍る。
それもこゝ此心になん。ともかくもおぼしすてぞ。
もれきさせぬへとこゝ思れば。いと（中ム）まづらいしく
なりて。いさや（詞）こゝろの心ゆきまうちとけて。
ゆくさきの有さ風にしりがこさをとけなげきて。
ことに物もの給ふ事なりぬ。明ぬれば車などなて
こさて。かえ（常陰）のきうそこなすぐ。いといらごしきげに
をびやかしこれば。かうじ（浮舟詞）けるくよろげにこれを
ゆえしさきてなん。猶志がしかくさせなて。いとは乃
中にともいかにともしひこまへめぐらし侍程
かずにもべらずともおもほしもれこずなるにと

をもなしへさせぬへなど。うちなさけしこさくて
をさて。これ(ほん)はかくもいと心ぼそくなるぬ心ちに。
こちたれ出んことをしへど。いまめしくおかしく
をゆかあらりに。しばしもこなれなんとしへだ。
さすがまうれしくおもほしより。車ひさしき程の
すこしあらう姿ぬるに。(白)家うちよりまゐで給。ワが君
おぼつかなくおぼし給ひれば。志のびこるさ夜まで。
此車なども例ならでおりしますに。さしはひて
をしとゞめてこれがらうに此車よきてあり
給。(白詞)なぞのくる夜ぞ。くらさ程にいそぎいづるをと
めとゞめさせ給。(白ん)やうまてぞ思びこるところは。

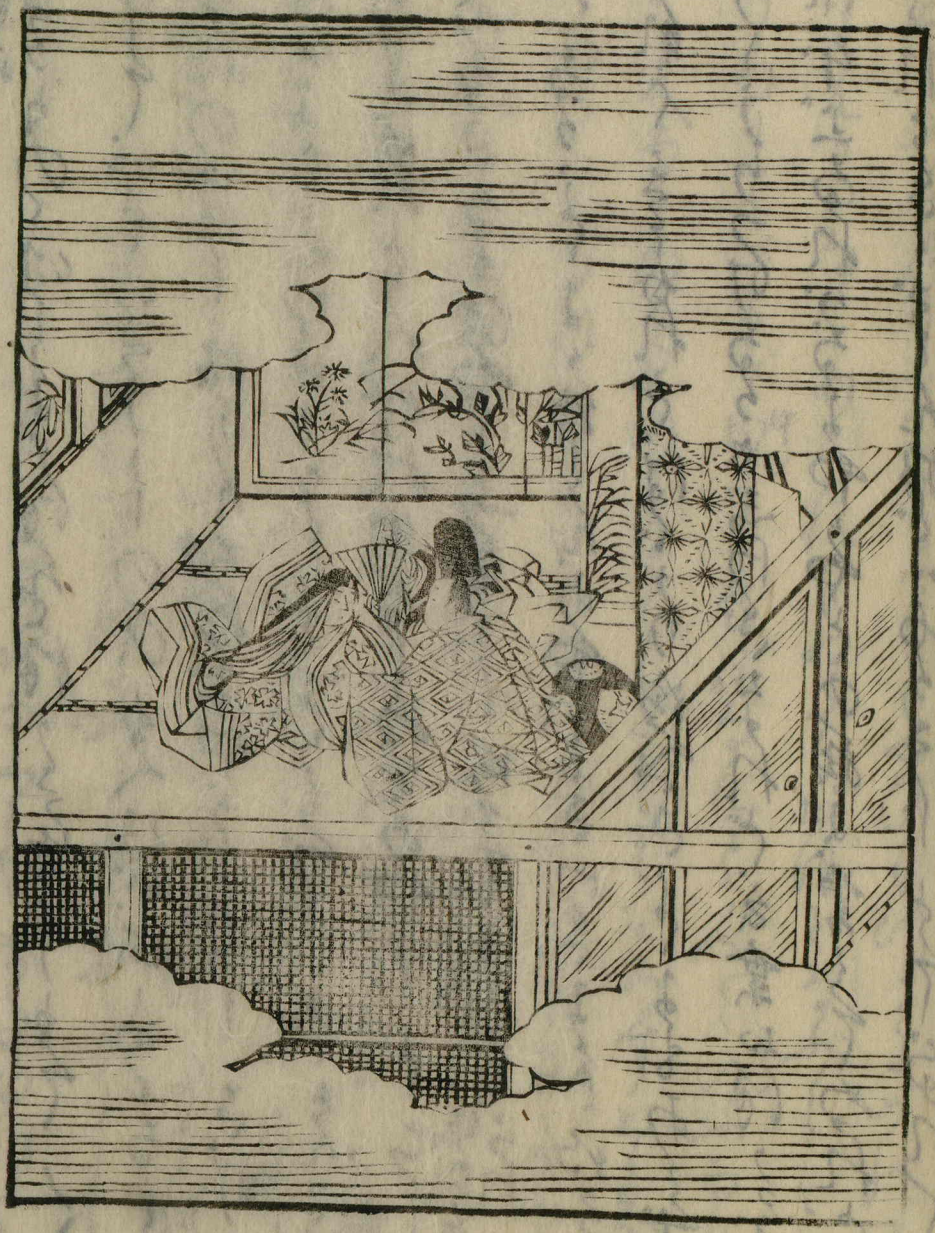
まぎれいげるうしとれ心ならひにおぼしよりも
むくつけしひたち(浮毋むかひ人詞)愛のまうでさき給とす。旦(句ノ者)か
やうなれ前ども。愛こそあざやかなれと。つらひ
あへるをさくも。げにこよなれこれ程やとかるしく
むふ。こゞこれ(浮)れ才のことをむふゆへそをのれも
人ぐさしくならまほさく思しけるまして(浮ノ事)さしじ
こ後な後くさくやつしてこんことはいこうしく
何ことしくさひなりぬ。(句)宮いりなて。(詞)ひたち愛といふ
人やこうにかよりし給心あるあさぼらけに。いそぎ
いでつかふる夜ぞひなどこそことさらめきてこし
つれなどな後おぼしうたがひての給。(中ん)さらにくく

めてもらいたしとおぼしてなゐいふなどがけつ
くてのころ友ぐちまてあるける人にとまいま先
うしうもえしざめる紙ゆへくしげまもの給か
すれ人のきくとがめつべきことをのこつゐり
ちりない給こそおきさ君にさてぐとうちそむき給も
けうしげまおしし何(旬)くかもしらずおぼとのごもり
しるる人どあまる来りなへばしん殿(でん)まいりなぬ
君(きたい)の家にことくしきれなやこまもあらで、をこ
ちり給まそれば心ちよげまて左(夕)のおぼ殿の君ぐち
などごうちぬんふるぎなどしけくあそび給夕
つる家(旬)こゐるまいたしせなへれど、女(中)君もれ

ゆするのほどなりなり。人ごもをのくうちやすき
などして。けまへには人もなし。ちいさきつらいの
ある也て。句詞おりあしきけゆするのほどこそこぐるし
かめれ。さうぐしくてやながめんとこそしめへば
大輔詞げにおいしまさぬひまぐまこそ例いすまきおや
しう日ごろもまれうがしせぬて。かふすぎがこれ
月は日もなし。九十月いつでかはとて。汀かう
まつらせつるをとこいふいとおしがる。つるぎみも
孫めへりかれば。そなるまこれかれある。ほどに。句家は
こくずこありきぬて。ましのくまれいたるゝね
つらものこゝつる紙。句ん いまゝりのきかれと思しく。

さしのぞき給ふるれほどなるさうじのほそめる
ゆきこうりミぬへバさうじのあるこそ一尺
ばかりひきさけて屏風こそこりそのつまに市丁
すまそへてこそこりかくびくひとへとうちかけて
志をん色の菌やかるるにをこなへしのをりものと
ミゆかさなりて袖ぐちさしいでこり屏風のひと
ひくこくまれこうより心にもあらでミゆかなめり
いま来りのくちおしからぬなめりとおぼしてこれ
ひさしにかくふさうじをいとこそかくなしあ
けなてやをらあゆミより給も人しらずこなるの
らうのなるれつぼをんざいのいとおしう色くに

さきこぞれこるは屋り水のけうりのいしこうさ程
いとおりしそれいとしちりくそひかしてながむる
嵯峨おさろさうじを今すこしとしあけて
屏風のつまよりのぞき給ふ白浮ん いかもひもかけず
例こるこまこさるれこる人まやあくんとせて おさ
あがりこるやうぐい白ん いとおりしうミゆるり 例の
れころますぐし給もで さぬのすそをさしへおて
こるこのさうじはひきこそおて 屏風のもざ夜ま
ねおぬ浮ん おやせとせて おふぎをさしうつして ミ返こる
さ夜いとおりしおふぎ紙まこせながら白ノ さしへおて 詞これ
ぞなのりこそゆうしそれとの給ふ浮ん むくつけくなり典



きつねのつけしは。神をはなれてく
して。いふ／＼いふこしのびあれば。しばらくおかす
ずみのあし法しん大ねまやうぢうし。さけは
ひさぜもせつのさうしまいとさづしくきんる
おすめれとんげれ例なすぬをおやしとさらて。
おさすこなすひやうぶきしなおてきこう。られは
いなすことまゝ法しん。おやしさつざうと法か
れこさあれど。ばずうり法べさよくまもわくず。
くうちつけなられ。きつざえすれど。言葉わ何りか
れなぞあれば。おすめやうやくの法は。善なそめれと
これとさうざしん法どいゆうさうじよてむれく

しくかし給ふ。旬家ありけりしせひとゆるまゝめれと
いたんかるなくおきれてぬるり。御目とるぶしもと
うろまて。いまぞ中ノ口しせ給なんと人ぐいふなり。
おまへなるぬかるのこゝかうしどもぞおろすなか。
しるるいたるれころかるまゝしれして。こうきこなす
ぐし。一よろひぐりこて。びやうぶのふくろまいれこ
めころ。所ぐまよをかけ。なまかれあらくかなりさ海
まゝもるちこり。かく人のまれしこまへぐとて。
かふこちのさうじひと海ぐりぞあけころ紙。
中内人
右をとて。海いふがむすめれさふし海さて。かうし
おろしてこくまよりくなり。右を詞ゆかくや。まぐ御目と

なぶらもまいらざりけりこうしをくるしきる。
いそぎ来りてやこゝる面どふよとてひきあぐるに。
家(句ぬ)もる面ぐるしとさゝ給ぬれとこゝるいとくるしと
せて。もれひくこをぶらやつとうに。をぞきへまて。抽冥(浮ぬれと詞)
給らん。こゝるいとあやしきことの給ふりこゝるへ
こうじてゐん。えうごさ給らでゐん。行ぶ(左近詞)すぞとて
さぐりよるに。うちさすがゝるゐるおとこのいとうら
がしくて。そひふしぬへる紙。例のかしうしぬ御
さ面とせひよりにかり。女の心あらを給まじきこ
となしとうしられば。げにいとこぐるしきこと
ともに給ふれ。犬をいかに申れさきん。いまゝりて。

よしはなれ太夫といへるなのしきゐん。何事ありて、
御前こそ此のびてこそしきあそてこゝろを
おさまりしくりやまれもしくさへど、家にとゞら
給はず。おさまりしこゝまでおそるおしきへそれおを
ちまべるゝん。咲をがいひつくしこしも、いとなし
うすべての今宵はおしさありとこゝろえがたく
おぼされそどいのひくいひしこ給。心づきるげる。
きしくとぞくとてもまてあるまじ、さいさいじうまちぬ
げりおもへるがいとおしくれば、情ありそうしらん
給ふ太夫をうへまちくしそおりしまもりとおしく
いるおもはすらんと守ゆれば、れいのこゝろうくさ
れさ波それがれ此もいるおもしてさぐしうしぬ

さ風まゝ給ひんとすらん。うしろやすくと返くいひ
ときつゝ抱ととゝいとあしくあげきどいうゞ男し是。
さあしふ人どもすくしつゝやうまよろしきは。
ゝすて給ゐくおやしき人のれくをあれバいかで
かハしより給けんと何さましさまもれもいられ
給ふず。上ぎ(太子内)あまる年り給日まで。おそびこゝろふ
れぬてハれいもうゝ時ハとそくもつゝりこまへだ。
ゝれうちとけてやすゝ給ぞうしさてもいかますべき
ことぞかれぬれとこそとずまじかりかれ。いとゝ
ひておてまもり給りひきもかれぐり給りいべく
いてしらつれとおれと(中ノムツ人女ニ)ゝつゝりしていとあし

がほどは。内より人来りて。大こやこの夕暮より
れはるるやまを給はらず今いうじくをもくるや
まをぬふよしゆさす。君を心るさおりのれるやこ
れ。さうしさきんとてころ。お扨いでやいまをうひ
るくもあべいと紙。おこがましくあまりなをび
やうし罪し給そといへば。いるまぐしうるべしと。
志のびてさしめきかかす紙。うへハいとさきまくき
人のれなどまゝそあめれ。すうし心あらん人を。
我あらりをきへうとゝぬべくありとおぼす。来りて
れ使のゆよりもいますうしあそこしげは
ゆるきば。うごき給べきさ夜まもあらぬれなしきる。

河
これゝ来りたる例のおどろくしくとびやうれと
の給ふすれば家のさゝらひまゝらのしげつると
なんなれり約つるときもいで給はんことのいと
わりなく口おしきまゝ人めもおぼえれぬまゝ左を
たち出てこの御使とよしおもてよてとへば
つぎ川の人もよりきて中務（なかづかさ）の家もまゐらをぬ
大夫はたゞいまなん来りつるゝちまゝ御車ひきい
づゝ約川とゝきば（匂ん）げまにたるまゝ時ぐまやこ給
ありくもあるをとおぼすまゝ人のおぼすらんとも
たしたるくなりて いうじう恨ちざりをきていで
ぬぬ（淳ん）おそろしき夏のきめたる心ちして おきま

としひたしてかしぬへりぬれとうちあふぎあ
しきてかうれすまゐいよろげまつけて、けしましう
びんなりそりかくおりしましそめてさしまらさ
ことはらじおれおそろしやかぎりなき人と宮
ともやすしぬれ首様いとあぢきなうべしよ
そのさしたるれさしん人まこそよしともけし
おぼしられ給ふめ人さてもかくいつきことく
しふのへてがまれさうといぎしてけとゝなりつれば
いとむくつけくげすくしき女とおぼして、手紙
いといたくつまきぬへるこそおを人のけさうぐちて
いとおりしくもおぼし給つれ、常陸かれ夜まはかふも

いうじくいさかひ給ひ。こゝにひと所のれうへを見
あつかひ給とて。ゆがこどもとがおぼしすてたる。
まらうとのおもすかほどれれさびねこぐらしと。
おもくしきまでぞ罪を給けり。しもべさへきて
いとおしかりけり。すべてこれ常陸が聟おれのきこゑぞ。いと
おいぢ(ぞやう)なく見え給。これれと侍らざらましかば
うらくやすらぶ。むつかしきことをおもしく
侍りともおぼしかるとしごろのまくにて。おれし
ますべきものをなどうちなげきつゝいふ。浮ん思いたゞ
いまはともかくもしひめぐらされず。こゝにいうじく
らしたるく。こしらぬめ紙ミつるよそへてもいかに(中ノ)

おぼすらんとせふるまびしかれバうつぶして
なき給いとくるしとゝなつひて何かなくおぼす
ちくおもきぬ人とそこゝにぎなうなしかるべかれ
よその覚しいちくなき人いとくちおしかれど
さがなきまゝ母にまゝ海れんよりハこれハいと
やすしともかくもしまり給てんなおぼしくに
きそさりともしのきの観音おかしませぢ長と
むきそし給らんなるもぬれ身よこびくしきりて
まで給ことハ人のくなかづりぎ海まのゝ望ひ
ぬしさるをかくもきかりとせふがりの此さいもん
おかしませとそ思ひんじもべれバおがきゝハ人

わかれまではやま路ちんやどをやすけよひ
おくり。(白)家はいそぎて出路あり。酒ちうさうしまや
あらん。(浮ノ奥カ詞門ニ)しゆるのこうどより出のへば。まみの路御
息もさこ面。ひとおそまうぶりまちくさくて。
心だへあつかうらちぢ。うちずのてすぐ路程。
(浮ん)すゞろよわゞうくわばゆ。う川し馬どもひき
いぶあそ。貴ぬまさうぬ人十よ人づりして
京り路。(中ん)ぢへはとあしくうるそ(浮ノ)ちうんとて。ちうず
ぐぬまで。(中詞)大家ちやま路とて(白ノ)京り路めれば。よひは
出路いぶ。ゆすゞのまぶりまや。心ちもちやましくて。
かくさね錦しぬと。わくりのへ。つれぐまで おぼさ陪

らんとさえしぬへり。(淳詞)えぐり心ぢのいとくるしと
侍るを。ふめしひてとめれとして罪し給。(中詞)いかなる
仇心ぢぞと。ふちかへりとふらひきえしぬへば。(淳詞)なる
心ぢとも覚しず。ふぐいとくるしく侍と罪しぬへば。
(二人ともに中ノ人見女)おれ宿をめまじろきとして。かくいらいたくぞ
おれすらんといふもふぐたするよりはいとおし。(中心)いと
くちおしく。心ぐるしきつぎかれ。(蓋)大将のころと
とめたるさ夜まの給めりしを。いかまあはくし
くしひおとさむ。かくえぐりがちしくおもする
人は。さてまくてぢちなるぬことをもくゆりいひま
こまことにすくししもずなるんことをも。さす

かなこゆるしけべうとそおもすめれ。此(芸)ハ同もで
うしとおもはんこといともづしげる心ふるき後
あいなくせふことそひめる人(浮)のうへなめり。年ば
こずしらざりつる人のうへなれど心ばへかたちを
これがえせひもなつまじうらうたく心ぐるしきる。
世中はあさがたくむつしげるるものかれ。我身乃
資格はあめことおほかる心ちまれど。かく拘もなく
きあもこけべかりける男のさはもぶれずなりに
けるにそ。げにめやすきなりかれ。今はしてこれ
にくきころそひぬへる人(芸)のなごらかにて出もなれ
なじ。さらに何ぞもせひいれずなりなんとおもほす。

いとおほうる中ぐしなれバとみまをえほしや
られず。おきゐるまへるもくるし。しろきれぞ一
きほづりまておもすゝほそやうまてかゝしげ
なり。これ君(浮)は夜ことに心ちもけしくなりまされ
ど。めれといとうるはしくしとしも有ばほ
おぼすらんをこゝおほとうまてえしなりまへ。君を
の君なぐまはとのけりき夜ひじめよりうり給
らんとをめてそゝのしこそ。こゝるのれさ
うじのもとまて。君をの君に抱きてしきをん
といへバ。こちて(君を)出されバいとおやしく(めれと詞)給つることの
なぐりに。男もおつうなりまて。まめやかにくるし

げにこしさせ給紙いとおしくこゆる此前にてなぐ
さめ罪しさをこまへとてなん。おやまちもおハきぬ
此身をいとつまじげにおもほしまびにこめつる。
さすがにこそいさくかにても世をしまへる人
こそあれいかでかはとことわりにいとおしを
こなうとて。ひきおこして来しきなう。我にもあら
ず人のせかんこともしづしかれど。いとやうなる
おほときすぎ給へる君にて。としいでられて升
ゆへり。ひるいがこなどのいこうぬれこる紙にて
かくして。此のうにはそむきにへるさ海。中原を
こぐひなくこなるに。けをとうともこしぞおてに

おかしこれはおぼしつきなかゝめざ海しげなる
ことはいりなんかしいとかくらぬをぶるめづらし
き人おかしうも給はれころをとゝ（太をかねがべし）あらりぢりぞ
おまへまて（浮ノ）えちぢあへ給はるばこゝろりける物語（中）
いとなつかしくしのて例（詞）ならずつくましき前
なとかゝひなし給そこ（大）姫ぞ志のおもをずなりまし
のち。ひすらくよなくいうじく男もうらめしく
多ぐひなき心ちしてすぐすよいとよくもよそへ
られ給はれさ海をこれはなぐさむ心ちして表になん
もふ人もなき男は。ぞうしのはころざしのやうは
おもはさば。いとうれしくなんなどうらひのへど

いと(浮ん)抱つまし、くて、まぶひるびたる心は、いへき
そんこともなくて、年(詞)だいとくるかるのミ思字
えさをしは、かうこなり、侍ぞ、なりぞともな
ぐさむこゝちし侍てなんとゞりいとけうびたる
と思ふていふ、思(仲)るどさり出さきて、右をはことゞり
よまをてこゝ給ふ、むかひて(浮ノ)抱たぢもえしあへ給ず、
心はいれてこゝあへ分用かげ、さしまうしとこゝゆる
所なくこ夜かはかうしげなり、ひこいつきまゐ乃
ゆりたる心ちをて、いとあはとうなるあてさは、
こゞそれとのこゝひ出られバ、思ましことは絶も
さゞめた夜をで、いと長なる人のうちかれ、こゝで

かうしもまさけるまかあらん。ご夫まいとよくまなり
ころなめりかしご姫(大)ぎ(八)はこ(八)やのれかるざ海ま。我も
もてうへまくなりころとこそは。ふるべどもいふな
ましが。げまくころ人はいうじきものなりかりと。
おぼしくらぶるに。泪ぐらそこ給。かれ(大ノ子)はかぎりなく
あてまけるかき抱かる。なつしうなよくかまかるは
なるまでおよくとこそこころさ海志まへりしま
こそこれ(浮ノ子)はまるまてなしのうねくしげり。
よろげのことをつゝましうのこしひころけまや。
こ前おほかる海めしさぞをとりころ。ゆへく
志きけるひごまもてつけころが。大(芸)ねのこ給はん

まもなくまくらをならべしなど、これらはごころは
せひありくそれ経・猶讃などしまして、おもひなくは
ありてぞ称名ぐらいはかをみてご文のれし
ぞもぞしごろあさましきしれ宿世などまゐらする○
どりぐら経・いとゆりくはまらずなりけりとうと
ならおもうくるしとやうらばんべの心ありの人ぐへ
いりかりつくんおかいとらうふけみするれ宿をいとを
じうおぼすとも、ひあるべきとくはいとおし
とひへだしたをぞさともあしじうれれ縁のとれ
ひきすへてずぐろなりくりうれへしそうしさしたて
しられてぞいひし、まやもおひても何あめやうなる

ころだへまこそ。打うそふきくちずさひ給しが
いさやことさらにもやあらん。そもしらびりし
よべのほかけのいとおほとろなりしを。とあり
がれまはしし給はざりしをなど。うちさくめきて
いとおしがる。めれと車こひて。ひたち愛へいぬ
ぶのるまかりくといへだ。むる(浮母ん)つづれさはぎて。人(羽)
もそしらぬさ夜にいひしつらん。さうじみを(中)
いかぶおぼすべき。かろすぢのもれまくしはおて
べもなき柏なりとをのが心ならひにあはしてしく
しなりて。夕つるに乗りぬ。宴(旬)おりしまさるぞころ
やすらて。おやしく心おされげなる人をまいらせ

とさて。うしろやすくいたれミ罪をさせるがゝ。いる
ちの侍らんやうなる心ちのし侍れバよろしぬもの
どもまにくミうしこれ侍とさしも。いと（仲詞）さいふ
ばかりのおさなげさまハあらざめるをうしろめる
げまなしきぞこゝろれまるげこそ。ワづらりしなれ
とてワらひぬへるが。心（浮母ん）もづしげなるれまみを
こゝろもこゝろのをまくもづしくぞおぼゆる。いかま
おぼすらんとしへバえもうちむきてしず。うく（詞）て
さふらひ給ひ。としごろのほがひのこゝろ心ちして。
ひとれまりきて侍らんもめやすく。おもどくしき
とまなんしまふるを。さすがまいてましきことま

なん侍りける紙。ふりき山のほいは。こゝほまたまん
侍べきをとて。うちなくもいとくおしくて。中詞 うく
まはなまことかうしろめたくおぼし給べき。とても
かくてもうとくしく。せひもなりきこしだこそ
あらめ。かしかしぎごちてよりしぬ人の。時ぐ申れ 自をさ
し給めれど。その心をこれ人こしまとゝめれば。こゝろ
づかひして。びんなうはまてなしきこしじと
ちつ紙いかまをしいかり給まかとの給。さらに此心 浮母詞
をばへだてありてもせひ罪しさを侍らず。かゝりら
いたうゆるしなりしすぢはなまあかけても
罪しさせ侍らん。その心なるでもおぼしもなる 浮母ハ本より祝歌とのんこ

まじきゆゑも侍るとなんどしへどころまこれミ
きてしさすりなどどろかるしぐ罪して おすおきて
うるき抱いこま侍る後おほぞうなるぬところまて
すぐ出て又も無しを侍らんと罪して いざなふいと（中ん）
おしくほいなきつぎかれとおぼをど えとじ笑
給ひず（浮母ん）おきましうるつるることは おどろきさ
もぎこれがおきくもれもきてしで出ぬかやう乃
うる毎がへ所とせて ちいさ紀歳まうけしりけり
三条（でう）つるりまざれだこころがまぐ川くりさしこる
所なれバ ぢうぐ出きさしつるひもをでなんをけり
表（浮母詞）これ此身（浮と云）ひとつとよろづまもてなやミ罪ゆ

れ。ごろまかれちぬ世まは。ありふましき孔に
よそありかれ。こげからづりは。こぐひたふるまきれ
ぎれしからびひとげなう。こぐさるかたりひ
こもりてゐしいべし。これ(ハ)はゆりは心うきとせひ
きたしあたりをむつびきゝゆかり。びんなき
ともせきなばいと人ゆゑ人なるべし。おぢきなし
とやうなりとも。こゝと人まもきしきずきのびて
おくをよをのづからともくもつうまいりてん
といひをきて。こづからはかへりなんとす。(浮ん)君はうち
なきて。世まあらんこと。どころをげなる身とおもひ
くしぬへるさ夜。いと(浮母ん)あられなり。おやけたまして。

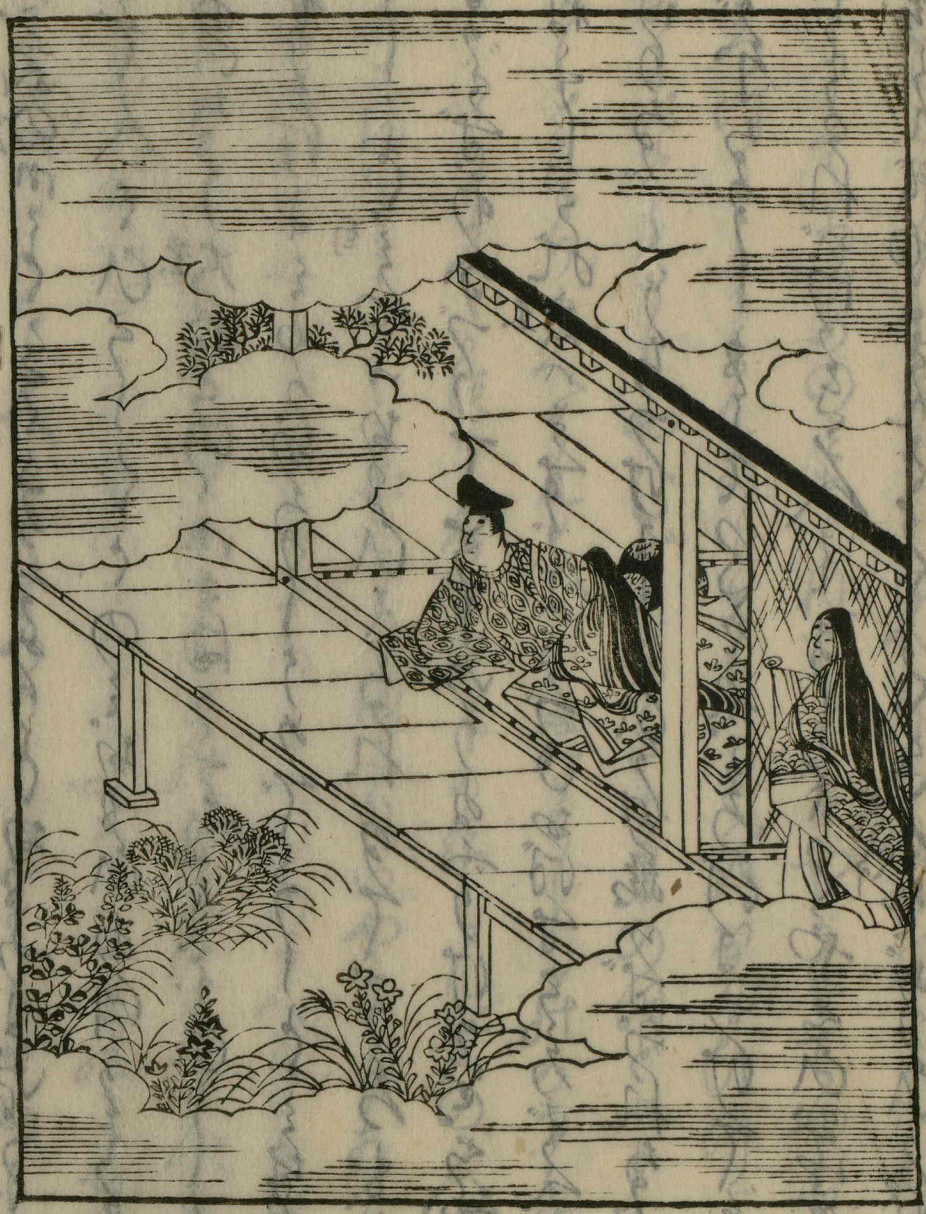
あらしくおしかれば、つくがなくておもふごとき
れさんとしふ。さりかたりいたきことをつけて、人
まもおもくしくしたれいたれんが、やせかたぬ
なりかり。心地ちなくなどはあらぬ人のなほりたち
やすく。しひのまゝまぞすぐしけりけり。かれ家をも
かくろへてはすへたりぬべかれど。しかめくろへ
たるんをいとおしとしてかくあつかふ。年ごろ
かたちらさらず。けれとなしひてかたこまうる
ぼそく。つりなしとしへり。こゝはまたかくあぐれて。
浮母詞
あやうげなる事なりさる心しのへざうしくて
ある物どもめしいでくつかひたまへ。とれぬべ

よしあしいひさだめて侍るも、いとうちつけめくなれど、
（常陸宮）うしろはりてずらうしろしくが、いとくるしかれ
だとうちたきてぐる。（大弐ノ）をばのおつひと、（常陸ん）うきも文
あきさまれるもひいそぎて、まうづるまさ海あく
いとあまずとゑんずる姪そり。（乳母ん）いと心うくこそ（おね）今
ようからまうざれど、もくありぞうしと、までちすくさふ
くるものとのうれば、いくころうくて、おさく
とゐれずかれ（自）家のはまへまで、いと人げなく（おねノ）こし
しるは、おほくおもひおもひて、ぐれだ、いとろう物
まさうしづまし、さまざまおもひしこともはやみ
まかり。（ニて）家までいうずとゆきん。まづうちさけくる

さ海こぬまとせて。のどうまねぬへるひろけうん。
こるゝまひろりて。まれよりのぞく。しろさあやの
なつしげ。ぬまいまやうきのうちめなどもきよら
なる紙きて。ぞしのゝまきんざいこうとて。
ろいいづくうはをとろ。いとこまげたまめなりと
こゑ。むすめまゝうゝなりまゝなる心まなきさ海まて
そひかしたり。白 宍のうへ 中 のなしびておいきし。此さ海
どものせひいづれバ。口おしのさ海どもやとこ径。
まへなるごろうは。拍 かねノ などいひこゝかれて。うちとけ
ろいいとこしやうろまほひなく。人ひろげまも
こしぬ紙。かれ 白 宍なりしいことかねなりやうとせふ。

ありしもいふとよ。[句]芳ゝ[かぬ詞]宴の[たぎ]薪のお紙とり
おもしろくもあれいかでさらにあけんおなじ
枝ざしなどのいとえんなるこそ。一日集りて出給
ほどなりしかばえおしぶなりまきごとぶるお
しきと。[句]いやのうちずじにまへりしをいの
き人たちまきたしまくうぐとて。いれも哥
よをぬたり。いでや[浮母ん]こころぞきのほどをおもへば。
人ともおぼしず。いでぎしはいとこよなりけり
まなりどしいひぬるるぞとつぶやかれど。
いとこちなげなるさ夜はさすがにしたるねばいか
かいふとて。こころにこよ

浮母
しめゆひしこしぎがうへも由よしぬり
いうるりつゆまうけ家下葉ぞとあるまいと（おねん）あし
く言して
宮（おね）式のくこ荻（えぎ）がもとくしらまきば浅也も
うろをけりずぞあらましいかでこげうらきて
させあきらめんといひたり



こゝ家の(浮母ん)れことこそこゝろなりとおもふる。いとゞい
かぞ人とひとしくとのゝ。おもひあけかたる。
あいなう大(蓋)ねどのゝれさ面かたちぞこひしう
おもかげまこゆる。おなじうめでこしとこなり
しかど。(句)こやはおもひたまれまて。こゝろもと
まらず。あなづりてとしいりまつりけるを。たふも
ねたし。これ(蓋)君はさすがまこゞ。おぼすこゝろぞへ乃
けりながら。うちつけまいひかけ給はず。つれなし
がれなるしまそいたれ。よろげまつけてたい
でたるれば。けうさ人もましてくやさひ出家し
給ふん。我物まをんとうくまくき人(お弱子)を。おもひかけん

よそにくるしきこともあるべかりけれなど。ぐころは
かゝるそあづまのこきかれて。とそやうくてやゝ
まろげなるうらんおしよしごと紙。あなひげく
みな。ぶとくらし。やむごとなきわれ身の何ごとれなくて。
あし。こゝまりのへうん人いふ歟すらしあれめあらず
いかなるりてそならふろをとゞめ給ふん世の人の
かりさ歟をこきくゝなどとり歟さりいやしうおて
あるまれまたるぐひてかゝる心もあるべきまれ
なりそり。げにどもなきこゝろなゝれきこえに字あるべき
やいあり。たゞ女ねをこの家のうちなる。文あるまじきまれはさん
ども。白文はこゝろんべきそまうしいふとも口あし

かりしまをしたりしかうしかう代(ざい)のれかしづきむ
すめ代えなりぬへらん人(芸)のれめうけしまは、いと
もいともたづしく、つくましうるべきものかれと
おもふも、すぐろまうちもあくがれまかり、ふびの(浮ん)
やどりハつれぐまて、庭の草もいぶきさうち
するまゝ、いやしきあづまごもしうもれどもがり
のミいでいり、なぐさめまうるべき前載(せんざい)のかれも
なし、うちあぢれて、たれぐしかうでありし
かうすまゝ、宮のうへ(仲)のれなりさ夜しひ出かり、ひかい
心ちまゝ、しかりかり、おやまくぐちぬへりし人(白ノ子)の
れけたひも、さすがましでこれて、なまごとまうあり

けん。いとおほく哀(あはれ)げよの給しかれ。なぐりおかし
かりしれうつりがも。まぐ御りこゝろちしして。
おそろしかりしもせひ出る。母君(浮母ノ文ノ詞と云へ)ごりやと。いと
あはれげなるかことをかきてとゝを給。とろかるらず(浮ん)
こゝろぐるしうせあつかひ給めるよ。かひなうもて
あつかれなることく打なれて。いかよつれぐ(浮母ノ文詞)
こゝろもちぬ心ちし給へん。志げし思ひ出しぬへと
なり。返(浮ノ)ことよ。つれぐ(文ノ詞)はなよか心やすくてなん
ひ(浮)こゝろなるようれしからまし世中よあらぬ
取とおもはましかば。おされげよいひこゝろを。こゝろ(浮母ん)
まゝよそろくと打なきて。かうまどりしもぶる

やうにまてなすことくいうじかれば
浮母
うき世にはあらぬところをもとめても志が
さりをこうよしまがれとは代くしきこと
どもをいひかけてなん心のべけるかれ芝ん夏ハ
れいの秋ふくなりけころなるひ宮流ノ事ましことなれば
ねざめくに物にすきをず衣にのミ覚し給かれば
うぢのこぐうにくりまてつとき給にこづから
おりしましたりひさしうこ給ハざりけるに山の
紅葉もみぢもめづらしうおぼゆこだちしたん夏でんこうこハ
いとまれぐしうにくりなしたり芳むしいとハ八とそ
ぞてひぞりぞちぬへりしすまねをせひ出るに

こゝ家も迎しうあばしまして。さ庵（しんでんと寺に作りかへたりと云之）へてげうもへち
ありしまゝであばさるれば。つゆよりもながめ給。もと
まし山志つらひハいとしうとげまて。いまかたつ
かたを。女志くこ庵やうまなど。一かたなしぎり志給。
あじろ屏風（びやうぶ）。なまゝ此あらくしこさなどハ。かれ
こゝごうのそうげうのぐまこと更（さうら）まなさせしまへり。
山ざとめきたるぐどもをことさらまきさせまして。
いたうもことそがず。いとしたうげまゆへくしく
志つらもれたる。やまゝ水のほとりなる岩まゐ給
て。どこまもしられず
（基）しまてぬ志水まなどうなき人の面かげを

かまくらめぐりけん。涓とのとひつゝ。寺の尼君たち
くゝは立よりぬれば。いとうるしとことはべり。
さびそこはひそむ。おほげまうりそめはめて。
すがれのつまの紙ひきはがして。抛捨し給。寺まうく
ろへておくりしに。のつゐではまた人いさゝかころ
文をとゞめしとぞ。すゞまうぬくもく思ひて
こそぞとづれよしゝ。残されよりつかへたてまつれ
のゐへば。一日の比母君の文待さぶらふとて。家
くしこるなんあくがれ給めれば。ころもあやしくさ
山家はうくろへまれし給めるも。いと心ぐるしく。
すゞしちゝき佗どるしましがぞこゝはいつして心

すてしみちもなしなりしかばなぞこゝはわりなくして

やすらふべき便もなし山まではらやすく

えだひそでみんと侍しところ申人ごのうく

おそろしくすめる所はまことにわりなくおそれ

あまりのちぎりはうとき人はおそれはあらんとて

例の間ごとまゐりさしげそのこゝろやすらんと

ろうはきうそこしみへうつしやむしうしこゝる

出給ぬとのゝ人ばお間きゞと紙つゝへもへらんと

もやすし今さしは京をこ侍らんとは抱うへそ

白 きよりのぞまえ京しぬよとこそ申あやそてかともうくも

人のさうつるへぶしそておしぬおくとされひさまりぶる

時はちくぞひそい出ずやいなとけりふあらはちつひを

やぶりて。人の口がひとして給はんこそ。こうとかう
めとのゐへば。人ワ（弁詞）ことすことも侍らぬ。さくまくさ
こともこそいでまうでくれと。くるしげにしこれど。
（慧詞）れよきありなく事をと。例ならずしおて。おさそ汁
車なるん。そのこびのところこぞ口をきこまへ。夏
おこがましくひがつざすまじうをと。ほくゐこそ
のゐへば。ワづらけしく（弁心）。いかにおぼすことなるんと
しへど。おかなくあもくしからぬれ心ざ面なれど。
をのづからつがれこあるも。人こそなどいけしを給ら
んとせて。（詞）さらばうけ給ちりぬ。ちうきほどにこそ。
れ文などをことさせゐへし。ふりもへさうしら

めきて心しらひのやうにおもはれ侍らんも。いは
さらにいづこうめりや。けしましくてなんとさしも。
葉羽
ふゑはやすらべきを。人の拙いひいとうしてあり
ものなれば。右大将はひたちのゝゑのむすめをなん。
よばふなるなどもさりなしてんをや。そのゝむ常悟の
ぬし。いとあらくしげるありとのゝまへば。うち年ん
わらひて。いとおしとせしぬ。葉くらうなれば出給。しる
草のおりしさ菓どもの。紅葉などおらせまして。家女二
ゆらんどさせ給。かひなからずおもしぬべく侍ど。
うしこまりをさしてうさ後まて。いたうもなれ四九
給ひずぞあめる。うちよりこゞのおやめきて。入乃女三

文ゆゑ男しのへぶいぐ（惡心）やむごとなきうへハうざう
ちくぜんのかみ（筑前守）ゆゑ（由）ゆゑ（由）ゆゑ（由）ゆゑ（由）ゆゑ（由）ゆゑ（由）ゆゑ（由）ゆゑ（由）
男しのふ文づかへまへてむつかしきつとめ乃
心のそひとりもとりかりの給しまぶつと
ゆてむつまじくなびきてトらうのうちひひとり
うけたまわりあり（惡心）ぶいぐ（惡心）ゆゑ（由）ゆゑ（由）ゆゑ（由）ゆゑ（由）ゆゑ（由）ゆゑ（由）ゆゑ（由）ゆゑ（由）
もれどもの御中びうかりにてつけうとの給
ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）
ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）
ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）
ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）
ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）
ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）
ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）
ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）
ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）
ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）
ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）
ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）
ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）
ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）
ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）
ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）
ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）
ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）
ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）ゆゑ（弁）

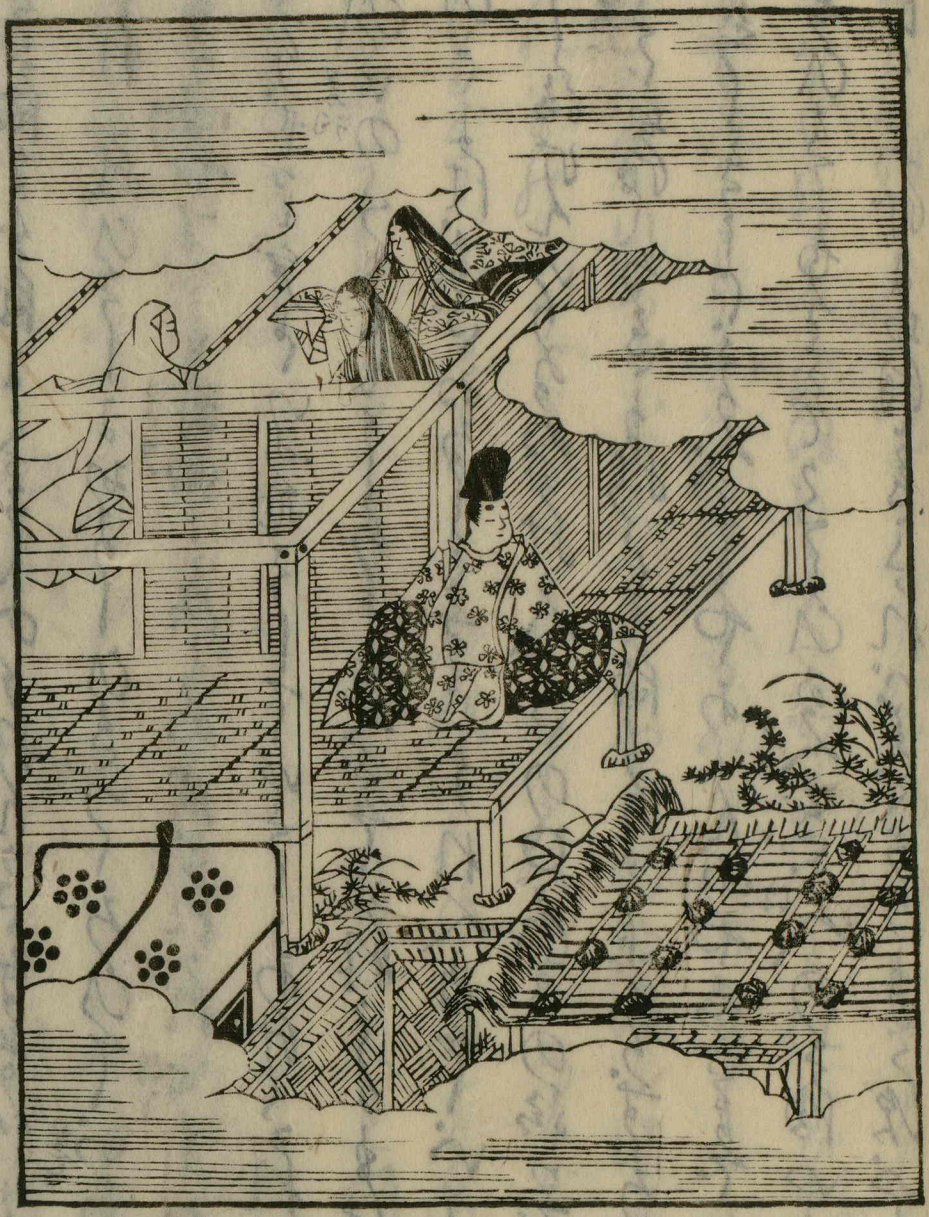
かくことどもせひ出されてながめくくしてなん

きつきけるいとつれぐに人めもえしぬ所なれば
そろやすくひきいれてかくなんまいりきつると
しるべのをのこしていまきこれば福瀬(ふつせ)のとをに
ゐしける人出きておろす(浮心)おやしき所にたすがめ
くしあるすにむかしがたりもしけべきひとの
きこれがうれしくてよびいれなて おやと思しける
人のれあたりの人としるむつましきるべし(弁詞)義
人しれずこなりし後よりは せひ出きこしぬおり
なけまど世中かりせひ人すてこう男にて
かれ(句)文にぐに来り侍しぬをこれ大将殿のあやしき
までの給いきしかば せうまへおこしてなんと思ひ

君もめれとも。めでこうしとこをき寄してし人の君
さ夜なれば。けすれぬさ夜まの給へんも衣なれど。
まちうまくおぼしこだらるんとはしひもよらず。
よね打すぐるほどまうぢより人まいれまとて。
門まびやうまうちこく。さまやなんとおもへば。
弁あけさせこれば。車をぞひさいるなる。おやしと
ちふまおまぎまこいめん給いこんとてごのちうき
こさうのあづりのなけりをきさせこまへれば。戸
ぐちまねざり出こり。夜すうしうちそくる。風も
いとひやくる吹いりて。いひしらずかほりくれば。
ううなりかりとこれもく。心ときめきしけ夜さ

れけるひかしはれば、よういもなくあやしさるまぐ
しひあへぬほどなれば、心さらぎて、いかなることよりあ
らんといひあへり。心やすき取まて、月代のしひ何ま
なことも、罪しさをんとてなんいちをあへり。いかに罪
べきことよりと、君ハくるしげにしてゐゐれば、めれと
こぐるしがりて、しかかりしましたるんを、こちながらやハ
返しなり給ひん。れ殿ほとてくなんと思びて罪し
めちうきほどなれば、といふ。うぬくしくなどてうさハ
あらん。つうきれどち地罪し給ひんハふとしもしこれ
くべくもあらぬ紙、あやしきまで、心のどうまもれふう
うかしすり君なれば、よも人のゆるしなくてけとけ

給りしなどいふほど毎やく給へれば夜ハいとくらし殿
ねんのあやしきさまたるに夜(やごとう)りしてやうれこうこれ
すこのくづれいとあやうし。これ(殿のうち)人(黒と云へ)の車いるべくハび
きいれてこうどさしてよかうの人のともべくして心ハ
うこそあれなどいひあへるもむくく(黒心)しくこうなら
もぬ心ちし給ふ。されてはこりは家もあらなくはなどは
ずさひてさとびこうすれこれもしつるこはぬへり
さし(黒)とむ(つイ)りむぐらやしげきあづまやれあまり
ほどふる毎ぞくさうれどうちはらひぬへるをひは
比こうしなりまでおつまれさとべもおどろこさね



とゝ御かゞ御はゝはゝしてのがれんとみすゞ持だし。
これこれひめしはおましひきつくろひて。いられ
ます。心やすくも對面し給ふめ紙。これこれおしむ
うり。やアまおとハいふ抱きしてびゝくあけられば。
めぐのうくこもうしめしまくぞそれ。かうもれ
のとまは。おちおちずしうれへおそいうく
し給けんいりおめ。これ人ぐくのゆびものゝ給ひで。
ざぶおもしおきまもれらくば御よりこしうらずゝきま
ゑしこうし。さらへこゝやわらんおやまつさきので。ぞ。
もひここもつとぞつゝひおんべき。人のさ御いかく
らうげよおほやとされば。こゝとよりあやうば。いと

衰とおぼしかりほどもなうあけぬかうちすゝる
鳥などいなんで、おほちかさ所る。おほどれ（抱うる人の志之）こゝろ声
して、いかるとかきてもしらぬなれりをして、
けむねて、いなどぞきてゆかやうの鶏ぼらける
これがもれいてゞきてゝりもれて、とまれやうちなんぞ
りしときて給も、かゝりよもぎれまゐるゆゑ、なしらひ
給はぬうちる。おしうも有かり。爲ね人を門
あかて、芳をとす。をのくいりてゝしなどする紙
きてゐて、人めして車つまぎ、ようをさき給。（字と）りさ
いざきてのきぬつ。これもくあやしう。あへちなさ
ことをしさまんぎて、九月（祓云と忌月之）まもなりけるを、心うもん

ひぐや、いまよしつくとぞとなげくぞ。あまぶ恵も
いとくおしく、志の和(かう)なることぐもなれど、(弁詞)たちれ
づくおぼすやうあらん。うしろめたうなさひ給ひ。
なが月はあすこそをちぶときくしかといひ
なぐさむ。ふふは十三日なりなり。あまぶ恵こゝにハ(恵ノ俗ニ)元
あらじ。文のうへ(中)きこしめさんこともあるかり
志のびてひとりけらんも、いとうしてなんと
きこゆれど、(恵ハ)まゝにきこれこときりをならんも。こゝろ
よぐしくおぼしなて、(詞)それは後まもつゝさり申給
てんうしこゝにしるべなくてハ、さつぎなるさ所をと
あてのなふ。(浮俗)人ひとりや侍べきことのこまへぞ。これ

(浮)
君はそひたるぞうとのりぬ。(舟と二人へ)めれと河まぎ君のとも
ありしけしはなどもとられて。いとあやしきこゝろ
してゐたり。ちりきほどまやとせんばうぢへかゝる
家なり。(う)まちぞひきゝふべき心まうけしゐへり。
かはすぎほうさうじ(法性寺)のけたりおもしまする。
東は明たてぬ。けたき(法住心)人はいとほのかなる事りて。
めでつれて。すぐろまこひまかる。世中のつくまし
きも見しず。君ぞ(浮心)いとあさましきまもれも見しで。
うけぶしぬしたるを。石(芸行)たりきけたりはくるしき
地ととて。いぐきゐへり。うす地のほそなるが。車さん
なるは引へぐそされば。玄やるまうし出たるあさ日

かげに。あま（弁ん）君はいとうしたるくおぼゆるまつけて。
こ（大）姫君のれともまこそ。かやうまてもこなるまけ
べかりしかなふれば思ひけぬことをもこうかれと。
かるしうおぼしてつ。ひとすれどうちひそこつ
ゐくを。侍（ぶじ）従（侍従ん）はいとまくものくちじめまかくつち（弁たかれこ）
ことまてのりそひたる後ごまはまふまゐそうく
いやめるるとまくおこまもせふ。老（地）たるもれも
すぐろまるそぎもろまある物ぞとぞろそうまうち
せふ。我（恵ん）なり。君もこうへ（保）はまくかしのぐ。本れ気色ま
つけてもさしかるの意しさ両さりて。山ふくへ
しまさりたちけるゆらし。語うちあぐめて

よりぬぬへる袖のうさちりちがらなすがやうかり
出たりけるが川ぎりにぬれて此ぞのくれなる
ちるは此ちるをしの菜のおどろくしうまつり
うるをおとしかけのうゑ前にこけけくひさ
いれうまふ

蒸 うくこぞとうゑにつけてもあさ露のところ
をさこまでぬるく袖かれど心にもあらずひとりぶち
ぬをさて(弁)いとゞ志ほるぢり尾ぎこの袖もあるさ
ぬらす(侍従人)にうき人あやしうしらしさまかれ心ゆ
くうちにいとむつしさとそひうつうちに
思びがたげなるもれずつまをさくなて我(蒸)も思び

やりまうらうこのて、さすがるいぐ（芸人）おもふらんと
いとおしかれば、おまえのさしぐろ、これこちをゆき
ふこびりさるる成おもふる、そこ中とあく抱衣
ありれ、すこしおさあがりて、これ山の色もこのへ
いとむもれこりやと、さぬてりさおこしこまへど、
（浮）おかしき程るさしくして、けてましげまこいぐて
こりまこるぐ、いと（芸人）よく出せられど、おいしかる
あまりおほとさすぎてこりぞ、ころもとあるめいと
いこうこめいこる抱りら、よういのあさりしげもれし
給しいやと、狂言りこるきかるしさは、むなしき
申るもこちめべありおりしつきて、衣ありさむや（大名）

やぶりてこゝ給ふん。これよりて。うくすぐろり
まどひありくもれまもあしちくまと。せひつぐけ
ゐて。車より ありてはすちしうろせしひてこちさりゐて。
女は（淳仁）そく君のせ給りんことなど。ひとなげしけ
れど。えんなるさ夜まこうろかく衣まりうひ
ゐかま。せちぐさめてありぬ。何まぞ君はこゝるまこと
さしまありて。らうまぞよすをつぎとゐりかべき
すまゐまもあしめ給。よういこそあまるもなれと
こゝ給。こゝ御うより例の人ぐ御もがしきまでまり
あ門まる。をんなれ御ざいも。あまぞ君のるより来る。
君は（淳仁）せげりつれど。これ有様はいとそれぐし

河のうしろを山のいろもまてりやしろつうり
ぶ屋をいぶきて日ごろのいぶをさすくさをぬう
くらしまれどいろよまてをいるらしとすうるうる
うくてあやしうるぶゆ

參もし京よりのふみつきくまなくまでかよりあらぬ
ほとけのみのりぞちすぢこゝろの人をこそ。けふころ
しさ日なりなれど。いそぎあみしゆゑ。ござり
ごちのちやまじこゝは。抛いとなりけるとせひのへ
出てあん。はふあすらまてつしゝ給へ。さすがに。
もて家ともし。姫家とも字ん祖。ぢちとけられ首指
今すこしおうしろそいりおとししうもけらづし
なれど。まてくすべくもおそでぬあり。女乃れ
さうぞくちぢ。色こまうとせてさうされど。
すこし御中びとつともうちまづつまでざう。世のの
いとあへもとなりしれすゞるの。おてよな雨めし

りしのゝ志まれて。かゝのすそのありしげさ
などハ。こ雨ぐとあてなり。女二家のれぐしのいとじく
めでたきまゝ。をとりまじりりかりとゝ給。かゝ
これ人(ほ)をいりまてなしてあらきんとすらん。さゞと
まれくしげまて。かれ女三家にむかへすへんも。なと
ゝさくびんなりなべし。さりとてこれかれあり。
まて。おほぞうにまじらはきんハほいなりらん。志
げしこゝまりくしてあらんとおもふも。こずえさ
うざうしかるべく。衣におぼしたまへだなるか
ならずかたひくらし給。こ八家のれことものの給いで
て。むかしあ給ありしうこまやかにいひたれ当稱

ぬへどゝ。こゝ(浮)いとつゝましげまて。ひるこちまちぢ
こゝ紙さうぐ(葉山)しうおぼせ。おやまりてもかう心
もとあるきは。いとうし。としへつもこそん。ぬ中び
こゝざれ心もてつけて。しれぞあしかぐ。とやかとか
あしまりしかぐしもかくしろかようあるまりしとせひ
あをしぬふ。こゝまをけるきむ(琴)さうのことめし出て。
かうことゝもゝ。まして元(浮ノ)をじかしとくちおしかれば。
ひとりしらべて。(八ノ)家うをあて後。こゝまてかゝ物に
いとひさしうてふれざりけりしと。先げらしく
紙あるがらおぼしていとあつかしくまきぐりけく
ゐの絵に。月さし出ぬ。(八)家のれきむの音乃かぐろ

おどろしくはあらぞ。いとおかしく衣にひき給し
ぢやとおぼし出て。若これもくおはまし世に。寝(ふし)に
おひ(浮ノ)いでぬへらましかば。いますうし衣はまさりな
まし。ここの此有様は。よそのへだに衣によひしく
こそ思いでられぬへ。などてさる所にはさしどろへ
給しぞとのぬへば。いと(浮ん)もづかしくて。しろき扇(あふぎ)を
まさぐりつ。そひかしこうかくしらめ。いと(黒ん)くぬな
うしろうて。なまあいこうひこいがこのひまなし。
いとよくしひいでられて(大ノ事)衣なり。まいてかやうしな
こともつきなうしぞとしへなきぢやとおぼして。
これ(あまごとのこす)いすうしほのあい給こりや。あれワづつまと

いふことはさりともてなしし給けんなどくひ給。
そのやまとことばごとにつきなくなしひまれば。
ましてこれはいふ。いとゞ（慧心）ゐるまゝ心をくれたりとは
ましず。こゝまをさて。えおもふまくにもこざらんと
をおぼすが。今よりくるしきはなれめるはおぼさ
ねなるべし。琴（きん）はとしやまて。楚王（そおう）の麁（こゝ）のうへの
よろのさんのこゑとずんじめくるも。かれゆゑ（常陸ノ氏士なれハ云々）
のミひくあたりまなしひて。いとめでたくせふやう
なりと。仮説も罕ぬたりなり。さり（慧心）はあふぎれ色も心
をさりべきゆやのいりへとばしらむ（仮説）ぞ。ひとへに
めできしゆゑ。とくれたるなめりかし。としも

こそあれ。あやしくもいひつかれとあげて。尼君の
ゐるより。くぶもれまいれり。ちこのふるは紅葉つる
などありしきて。ゆへなからずさりまぎて。しきくる
りしまふつくりまうきゐる柄。ふ皮なるき自まふと
こゆれば。芸めとゞめぬふ程ま。くぶもれいそぎまぞ
こしける

弁 やどりまはたかりぬる私なれど常あげして
すめる月かれどふるめしくうきゐる代。芸ふげか
しくも衰まもあげされて

芸 星の名も世うしなぐしまこし人のおもがりり
をるねやの月かげ。つぎとかへりことくもなくて

のゐふとぞうちんつゝへけるとぞ

69038
6 Ap 78